

# Alternative Systems Study Bulletin

## メール版 第25巻第2号 (2017年7月2日)

13回目のメール版を送ります。

ルネサンス研究所などの複数のメーリングリストに投稿しますので、これまで手に取っておられなかった方々にも届くことになります。配信停止の手続きは、メールで連絡して下さればいいのですが、メーリングリストのばあいは配信停止ができません。お手数ですが届いたら削除して下さい。

この小冊子は、1993年から発行しています。最初は知的創造集団のネットワーク形成をめざし、数人の同人で始めました。しかし、私が阪神大震災以降多忙になったこともあり、第4巻(1996年)からは私の個人誌として再出発しています。そのころは協同組合のシンクタンクづくりをめざしていました。シンクタンクづくりは実現していませんが、以降隔月刊で発行し、主要な論文はHPに掲載しています。

メール版で発行したバックナンバーは、PDFファイルにしてHPの「バラキン雑記」のところに掲載しています。ぜひご覧ください。

2015年度の『ASSB』のPDFファイル。

[http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog\\_id=239](http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=239)

2016年度の方は次です。

[http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog\\_id=240](http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=240)

2017年度の方は次です。

[http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog\\_id=244](http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=244)

メール版は拡散自由です。またいろいろな意見や異論があれば、メールでお知らせください

編集 境 毅(筆名:榎原 均)

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール [sakatake2000@yahoo.co.jp](mailto:sakatake2000@yahoo.co.jp)

購読料 無料(カンパ歓迎)

カンパ振込先(郵便振替) 口座番号:01090-5-67283 口座名:資本論研究会  
他金融機関からの振り込み 店名:109 当座 0067283

## 25巻第2号 目次

はじめに

### 第1章 社会主義理論学会報告を終えて

1)なぜ今負債論か 2)負債経済から見てくること 3)宇野理論の問題点

### 第2章 社会主義理論学会6月25日報告 負債経済論

1. 私の負債経済論事始め 2. 負債経済論入門

3. グレーバーの問題提起 4. ラッツアラートの問題提起

(参考資料)

杉村昌昭、村澤真保呂、境毅編『既成概念をぶち壊せ!—100語事典—』(晃洋書房、2016年)より、

負債 境 毅

## 第3章 6月25日負債経済論報告資料編 はじめに

今回は6月25日に行われた社会主義理論学会 (<http://sost.que.jp/>) での「負債経済」についての報告と資料です。グレーバーとラッツアラートの引用からなる資料はかなりの分量ですが、メール版限定でつけておきます。

私は学会で報告することはあまりないのですが、この学会では数回報告させていただいております。今回は議論が弾みましたが、宇野学派の議論の仕方には違和感を感じ、冒頭に追加した「社会主義理論学会報告を終えて」で宇野の経済学方法論の問題点について指摘しておきました。私は70年初頭から宇野理論を批判し(『資本論』の復権——宇野経済学批判)、80年代末の論文『資本論』第三巻利子生み資本の研究——宇野利子論批判』をHPに掲載しているにもかかわらず、「お前は宇野原論がわかっていない」というたぐいの批判をするのです。宇野原理論は採用しないと公言している人間にそれはないでしょう。  
([http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog\\_id=231](http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=231))

この日の負債経済論はリーマンショック以降の現在の信用制度についての現状分析をめざしているのであって、経済学原理論の是非を議論しているわけではありません。でも宇野学派は学会ではいつもこういう対応をしているのでしょうか。人それぞれだと思いますが困ったものです。

さて、グレーバーはいわゆる「マルクス経済学」の流れではないし、書かれていることもそうではないのでなぜ彼を取り上げたのか、という疑問は当然のことです。それで「社会主義理論学会報告を終えて」ではこの件についても書いておきました。

あと、報告は引用中心であり、資料は報告で引用した箇所と対応する引用ヶ所の増補です。引用の冒頭につけた「①」などの符号は対応させてあります。というわけで、一応グレーバーやラッツアラートの議論をご存知の方は、ぜひ、報告の「第2節 負債経済論入門」(次の「共同研究の提案」の末尾に概要を再録しました)のところをお読みください。これは二人の負債論を踏まえて、私なりにマルクス主義的分析の枠組みの中に活かす試みです。今後はこの部分の共同研究を考えております。その企画は次の通りです。

### 共同研究の提案

2017年7月1日 境

#### 1. テーマ「負債経済論」の由来

6月25日の社会主義理論学会で負債論を報告しましたが、その報告の準備過程で負債経済論の構想ができました。当日の報告に入れた「負債経済論入門」がそれですが、長いので末尾に資料として掲載しておきます。従来、信用資本主義とか、投機・信用資本主義と命名したり、リーマンショック以降は、近代的利子生み資本と高利資本の違いとか、グローバル資本市場での高利資本のヘゲモニーとかいうことで展開してきた議論を、負債経済論としてまとめることができました。

まず、高利資本に根をもつ証券類を負債資本と名付け、これを高利資本の変異体と位置づけることにしました。そして近代的利子生み資本の領域(借りた貨幣を資本として機能させる株式や社債等)と、負債資本の領域とを区別し、後者を負債経済と定義します。負債資本の領域はニューヨークの公社債市場で、ここでは国債や社債を量的にしのいでいるのです。

なお、当日の報告はメール版 ASSB 第25巻第2号(本号)に掲載します。

#### 2. 共同研究の分野

- 1) 負債経済、負債資本とは、総論

- 2) 負債資本の種類と諸機能
- 3) 負債経済をもたらす破局
- 4) 破局への対応としての中央銀行論
- 5) 国債とはなにか
- 6) 負債経済の歴史
- 7) 負債資本の歴史的役割
- 8) 負債資本と階級闘争
- 9) その他

### 3. 成果は『情況』誌掲載

#### 4. 参考資料として報告より一部再録

##### 負債経済論入門

#### 1) 負債経済の定義

##### (1) 負債経済とは

負債経済とは、グローバル資本市場において、お金にお金を生ませる手段である金融商品の由来が、債務を資本として機能させる近代的利子生み資本とは異なるものによって形成される経済領域を指す。近代的利子生み資本とは異なるものとは、国債があり、また、投資銀行によって消費者金融などの債務の証券化による金融商品が作りだされている。これらは貸し付けた貨幣が資本として機能してはいない、高利資本を根に持つ負債である。これらの負債（債権・債務関係）及びそれに根をもつ金融商品が売買される経済領域（グローバル資本市場も含む）を負債経済と呼ぶ。

##### (2) 二種類の負債

近代資本主義は、他人から借金し、その負債を資本として使用して儲ける機能資本家を生みだした。この借手は従来の借り手である国家や貴族や地主や農民たちと比べてリスクが少なく、貸し手は低利で貸し付けた。近代社会に、根本的に異なる二種類の負債が生まれた。

借りた金で儲ける仕方は古くからあった。古代では海外交易に携わる商人たちがその担い手であり、中世では外国貿易に伴う為替の金融技術も発達したが、リスクが高く、低利の貸付は実現しなかった。

資本主義のもとでの貨幣資本家による機能資本家への貸付は、機能資本家が借りた貨幣を資本として使用し、剰余価値を生産するが、この剰余価値から機能資本家には利潤が、そして貨幣資本家には利子が支払われる。だから利子の大きさは剰余価値を超えられず、貨幣資本家は高利は取れないがしかし貸付額が巨大となるので、低利での貸付が定着した。

つまり負債には二種類あり、借りた貨幣を資本として機能させる場合と、消費の用途にする場合である。後者はかつては国家の戦費や王侯貴族の浪費、飢饉のときの農民の生計費などであったが、現在では消費者ローンとなっている。

##### (3) 負債資本と利子生み資本との区別

従来の高利資本は今日の負債経済の中核的資本となっており、新たに負債資本と名付け、その属性について研究することが必要である。利子生み資本と負債資本、共に外観は貸付けた貨幣に利子がつくというものだが、借りた貨幣がどのように機能しているか、その違いを明らかにするために、借りた貨幣が資本としては機能していない貸付け資本を負債資本と規定しよう。それが単なる高利資本の役割を超えて、現代の資本主義の破局をもたら

すような資本として異変をおこしているのだ。

## 2) 負債資本＝現代の錬金術

### (1) 金融資産は負債である

従来の金融資産

①資本家への融資、株式、社債等の貸し付けた貨幣が資本として機能しているという条件。

②資本としては機能しないが国家によるインフラ等の生産的投資を賄う国債。

③生産力として役立つ土地の地代の資本還元化。不動産資本。

### (2) 逆もまた真なり→負債は金融資産である

証券化の技術で、あらゆる負債は金融資産化できる。

今日のその他の負債

④住宅ローン、土地が担保となるリスクの少ない貸付。

⑤自動車ローンなどの耐久消費財。担保あり。信用商品。

⑥カードローンなどの日常生活物資の購入のための借り入れ。商品価格に利子の上乗せ。

⑦国の武器購入（戦費）などの不生産的な用途を賄う国債。

### (3) 遊休貨幣資本の麻薬としての負債資本

錬金術によって生み出された負債資本が、膨大な遊休貨幣資本の蓄積によって麻薬のように、今日のグローバル資本市場の存続に不可欠なものとなっている。

①年金基金

②保険

③大企業

④富裕層

⑤種々の投資媒介業とタックスヘイブンなどの装置

## 3) 現代におけるグレシャムの法則

グローバル資本市場での負債資本（高利資本の異変体）のヘゲモニー

4) 負債資本の歴史的役割（略）

5) 実践的な課題（略）

6) 負債経済の成立過程（略）

以上が共同研究の企画です。参加者を募集しています。

さて、ルネサンス研究所関西の研究会の7月例会で私が報告します。日程は、7月29日（土）午後2時から、きずな（京都駅八条口）にて開催します。

テーマは「現状の体制の革命か、変革か、抵抗か、改革か」で、このテーマは2010年末にルネサンス研究所が発足して以降、私が関西研究会で企画していたものであり、数回の研究会が持たれています。研究会の記録を見れば「日本ではなぜ大衆運動が起きないのか」というような発言もありましたが、しかし、2011年3.11大震災と原発事故はこの現状を変えました。以降主要なメンバーが大衆運動にかかりきりで綱領的な次元の議論はできませんでした。しかし、大衆運動も後退局面に入り、これを指導できなかった自分たち左翼の総括として、2016年に『日本の左翼はなぜ影響力を失ったか』というパンフにまとめられ

た太田昌国講演会をやり、以降は共産主義の研究所としての役割を自覚して研究会が企画できるようになっています。次号はこの研究会の報告を予定しています。

『日本の左翼はなぜ影響力を失ったか』(500 円)は発売中です。メールで注文してください。

## 第1章 社会主義理論学会報告を終えて

6月25日の研究会では報告のあと活発な議論がなされた、その議論を振り返って、いくつかの論点について補足しておきたい。

### 1)なぜ今負債論か

グレーバーの負債論も、ラッツアラートの負債経済論も、いずれも『資本論』体系とは直接のかかわりはない。グレーバーは負債にまわりついているモラルを問題にし、ラッツアラートは負債経済がどのような主体＝借金人間を形成するかという観点からの分析である。ではマルクス主義なり社会主義の側から、このような負債論を研究する意味はどこにあるのか。まず、この点が社会主義理論学会で問題にされたので補足的な説明をしておこう。

二人ともリーマンショックのあと、著作をものにしたのであり、リーマンショックの原因を解き明かすことからこの問題は明らかとなる。リーマンショックとはなんだったのか、それは従来の金融危機とはどのように異なっていたのか。この問題で共通の理解が必要である。この点で毛利良一による次のような分析は明快である。

毛利良一はその著『アメリカ金融覇権終わりの始まり』(新日本出版社、2010年)の「はじめに」で「問題意識 I : 2007～8年の危機の特徴」というタイトルで次のように述べている。

「第1は、世界最大の経済大国かつ国際金融の覇権を握るアメリカ発であることだ。」(『アメリカ金融覇権終わりの始まり』、9頁) 1971年のニクソンショック以降の「国際金融危機の震源地は途上国や移行経済諸国に移っていた・・・1970年代の石油輸出国機構による原油価格の引き上げ、80年代の中南米諸国に始まりアジアや中東欧アフリカ諸国にも広がった債務返済危機、90年代にはアジア通貨・金融危機から始まり、中南米やロシア、さらには米国ヘッジファンドにも伝染した危機などがある」(同書、9頁)

「今回の危機は、アメリカ発・アメリカ仕掛け・損失もアメリカが最大という危機である。アメリカの金融覇権はどうなるのか、一極支配体制は終わるのかという問いかけが生じる。」(同書、9～10頁)

毛利はニクソンショック以降の世界の経済危機が、OPECの石油価格値上げ以来のユーロダラー市場の成長、この市場での余剰資金のシンジケートローンによる低開発国への貸付、その焦げ付きによる累積債務危機、という80年代の経済危機が、90年代には通貨危機としてアジアに始まり中南米はロシア危機が起きたことを念頭に、07～08年の危機が「アメリカ発・アメリカ仕掛け・損失もアメリカが最大」という点を挙げている。70年代以降の国際的な経済危機の歴史的経過からの結論である。

「第2に、預金を受け入れて決済業務を行う商業銀行の経営破綻とか株価の大暴落という伝統的な金融危機ではなく、近年のアメリカ金融業で支配的な役割を演じるようになった投資銀行によるサブプライム住宅ローン債権の証券化と転売、各付会社によるお手盛りレーティング、保険会社による倒産保険の付与、自己資本の数十倍の借入に依存して投資を膨らませる高レバレッジ金融などが一緒になって金融工学を駆使して巨額の金融資産をもつ『闇の銀行システム』を作り出し、そしてそれが破綻したことによる危機である。」(同書、10頁)

毛利が第二に取り上げるのは、今回の危機のこれまでの危機との違いである。毛利はここでは触れてはいないが、危機はニューヨークの公社債市場から始まったのであり、株式

市場ではなかった。これはアメリカにおける経済危機としては歴史上はじめてのことだった。

「第 3 に、肥大化した金融経済・証券経済と世界の实体经济の関係の問題の大きさである。」(同書、10 頁)

この問題は危機の処理において、これまで見られなかったような事態を進行させている。毛利の分析をまとめると、ニューエコノミーは、2001～2 年の IT バブルの崩壊で終わり、2001 年 9.11 対テロ戦争下で、貧困層にマイホームの夢を撒き散らし、サブプライムローンが始まる。住宅ローンの対 CDP 比は、2000 年には 45% だったが、2007 年には 75% へ増えた。2006 年中ごろから住宅価格の下落が始まり、その後引き続き下げ続けてバブルは崩壊した。これは实体经济に大きな影響を及ぼした。消費の冷え込み。そして、金余りが、資本蓄積に基づくものから、年金基金や保険などの家計部門の消費部門由来のものへとなってきたのだ。このような事態は、中央銀行の行動も前例なき規制緩和となった。

「米欧は超金融緩和政策をとり、かつ破たんした金融機関を事実上国有化するなど、従来の新自由主義路線が『今日の利益は僕のもの、明日の損失は社会のもの』となった対策のありよう・・・注目すべきは、従来の経済危機において緊急財政政策の採用をコンディショナリティとして押し付けてきた IMF が主要国に財政出動を奨励したことである。」(同書、12 頁)

この変化はいったいなになのか。研究会当日の議論でも、マイナス金利についての議論がなされ、その意味の解明の重要さが確認されたが、この問題についての明確な解明はいまだ示されてはいない。

ニクソンショックのあとの変動相場制への移行以来、外国為替市場でデリバティブ取引が発達したことを発端にして、金融の証券化が始まり、IT 技術の発達に支えられて、資本市場の一大変革が起きている。歴史的経過としては、累積債務危機の克服として採用されたブレイディ債は金融の国際化と一体となっており、低開発国に金融市場の開放を強要してエマージング市場としてアメリカの資本市場と一体化させ、グローバル資本市場の拡大を成し遂げたのだ。これが外国為替市場にヘッジファンド等の投機集団を呼び込むこととなり、90 年代の危機を生じさせた。そして危機は一巡してアメリカのグローバル資本市場の一方の旗頭であるニューヨーク公社債市場を直撃したのだ。

リーマンショックの引き金となったサブプライムローンは、消費者金融の債務証券の証券化によってニューヨーク公社債市場での売買が可能となったものであり、借りた貨幣を資本として機能させる利子生み資本ではなかった。この負債をどう考えるか、これが今日の経済、特に信用制度を分析する際に、焦点になってきているのだ。

## 2) 負債経済から見えてくること

負債経済を考察することで、すでに概括した、ニクソンショック以降のグローバル資本市場の発達を新しい観点から位置づけることができる。従来实体经济と金融経済との関係の問題であるとか、金融化経済論などで議論されてきた。その問題の焦点が、金融資産として存在している負債と、そうではない負債とがグローバル資本市場で混ぜ合わされている現状を解析する視点として、後者の負債の領域を負債経済としてとらえることは資本主義の段階規定にとって決定的なものとなる。なお、この点については、当日の報告「2. 負債経済論入門」を参照されたい。

## 3) 宇野理論の問題点

研究会で気になったのは宇野理論を信奉する人たちの反応だった。私は、マルクスの利子生み資本論を武器に現状分析を試み、現代の信用制度における負債資本のヘゲモニーを論じた。ところが彼らは宇野が批判したマルクスの「間違った理論」に依拠していること

だけを問題だと感じてしまうようなのだ。私は一応宇野理論も頭に入れているのでよくわかるが、マルクスは利子生み資本を貨幣資本家と機能資本家との間の貨幣の貸借関係として分析し、この関係で機能資本家が借りた貨幣が資本として機能していて、資本の商品化が実現しているという見解を『資本論』第三巻で展開している。宇野はこの見解を批判し、原理論ではこのような貸借関係を想定できず、資本の商品化は株式資本で実現され、そしてそれは原理論では理念としてしか説けないと主張した。この理解から私のマルクスに依拠した利子生み資本論が間違っているという非難をくり返すのだ。

私は利子生み資本の解説を試みたのではなくて、現状分析の武器としてマルクスの理論を使っただけである。だから、批判するなら、それでは現状分析がうまくできず、宇野原論を使えばもっとうまくできる、という批判しかないはずである。しかし宇野理論の信奉者にはこのような思考回路は見られないのだ。私は70年代から一貫して宇野理論を批判してきており、そのような人物に対して宇野理論を採用していないという批判しかできないのは本当に不毛な議論だと考えている。

議論の不毛性は、原理論の議論をしているわけでもないのに、「高利資本など存在しない」という意見が出されたりする。確かに宇野の純粋資本主義の立場からすれば、原理論には高利資本は存在しないであろう。しかし発言者もすぐ認めたように、消費者金融はずっと存在していたのであり、「存在しない」のは宇野原論のなかだけのことだ。また私が株式資本が高利資本であるかのように主張していると誤解し、「株式資本は高利資本ではない」と意見を述べたりする。つまり宇野理論からすれば、利子生み資本とは資本の商品化であり、それは株式資本なのだから、信用制度における高利資本のヘゲモニーという私の見解を、株式資本が高利資本化するというように理解したというわけだ。私は借りた貨幣が資本として機能している利子生み資本とは区別して、消費者金融などのそうではないケースについて、高利資本の根をもつ負債資本として定義しただけである。前者が後者になったといったことは報告していない。

このような議論の推移を経験して感じたことは、宇野原論は現状分析の武器としては機能しえず、ただただ論者がその立場に立っていないということの判断材料として異端審問のごとき機能を果たしているということだ。なぜそうなるかは以前に、宇野の経済学方法論における実体と形態についての議論、いつの時代にも共通な労働生産過程が実体で、これを流通形態である資本が包摂するという理解について述べたことがあるのでそれを注として再録しておこう。

(注) 宇野弘蔵の理論の特徴は、まず原理論・段階論・現状分析という三段階論の提起である。「純粋の資本主義社会」を想定して、資本主義の純化傾向が顕著であったマルクスの時代に仕上げられた『資本論』を純粋資本主義社会の運動法則を記述する「経済学原理論」へと純化し、そのあとの帝国主義段階を支配的資本のタイプによって段階論としてまとめ、その上で現状分析が可能となる、という大仕掛けは確かに注目された。

私見によれば、宇野の方法論の問題点は、純粋資本主義の運動過程での抽象化に即して理論を記述すべきという発想、商品経済は共同体と共同体のあいだから発生し、次いで共同体内部に浸透したというマルクスの記述に依拠して、資本主義の特徴を流通形態があらゆる社会に共通な労働生産過程という実体をつかむという思想にあるとみている。(つまり「形態」が「実体」をつかむという考え。)

前者の発想によって、宇野は原理論の展開においては、思考による合理的な抽象的分析を否定した。事態抽象による抽象以外は採用できないというのだ。次に、商品の章で価値形態の分析に先立って価値の実体を抽象的人間労働と規定したことへの宇野の批判は、後者の思想と相まって、価値の実体は労働生産過程で説くべきという主張となった。ところが、このような思考は、形態と実体を分離させておいて、実体を超歴史的な労働生産過程という宇野の頭の中の観念の産物に帰着させ、その

うえで資本主義の流通形態という実体の欠落させられた同じく頭の中の観念の産物である形態が、この実体をつかむというのだ。

この論理操作は宇野の頭の中の観念の産物に同意を求める宗教的構造となっている。あらゆる社会に共通な労働生産過程の想定は思考の中での抽象による思考産物であり、特定の社会においてはそれは特定の形態でしか実存してはいない。形態をとらずに実体だけが共通なものとして実存しているわけではない。また形態の方も、実体と離れた単なる形態として実存しているわけではない。単なる形態はこれも思考産物としてあるだけだ。

マルクスは、価値の実体を価値関係そのものから、社会的実体としての抽象的人間労働という幻のような対象性として規定したが、これは価値形態を離れては実在しえない実体なのだ。労働価値説といわれる場合の理解はおおむね価値の実体が労働にあり、価値を形成するものが労働だというものだが、その際この労働を労働生産過程にある労働とみなしてしまう。つまり価値形態をとっている商品がもつ実体としてではなく、その外にある労働過程が実体としてみなされることになる。このような労働価値説自体が錯誤の産物なのだ。

ここで、資本は流通形態で、実体としてある生産過程をつかむという宇野説の批判を詳述しておこう。宇野は次のようにいっている。

「産業資本の形式では、それ自身が示すように、資本はもはや単なる流通形態ではない。そのうちに生産過程をも包摂することによって、商品、貨幣の流通形態にもいわばその内容を与えるものとなる。商品自身が、貨幣となる商品とともに、この生産過程のうちに生産されることになるのである。……それは従来の社会の生産過程自身と全く異なった生産過程をなすというのではない。むしろ反対に有らゆる社会の生産過程に共通なる、いわば社会的実体として社会の基礎をなすものとしての生産過程を把握することによって、商品経済をして歴史的に一社会を形成せしめることになるのである。」(45頁)

流通形態である資本が、実体である生産過程をつかむ、ということについて、宇野は『経済学方法論』で詳しく展開しているが、ここでは『経済原論』からの引用で済ませよう。要するに宇野は資本は形態で、実体は生産過程だと見ており、ここから価値の実体が抽象的人間労働であることも、生産過程で論証すべきという主張がうまれてきている。

資本主義の特徴を資本という流通形態が労働生産過程という社会的実体をつかむという宇野の方法論は、転倒している。資本が自己増殖する価値であり、資本の流通運動においては、価値が主体となっている。だから価値の実体、社会的実体としての労働は、流通部面にしか実存しない。生産部面では労働は価値を形成する実体であり、対象化され流通に登場する以前の未展開な流動状況にある存在なのだ。

だから、宇野流の言い方をもじれば、実体は資本であり、それが生産過程という形態を自己増殖の運動部面として形成するのだ。生産過程は社会的実体ではなく、それは、資本が価値増殖する資本の流通運動の形態なのだ。

つまり、宇野が主張している資本という流通形態が労働生産過程という実体をつかむというような事柄は、何が具体的な事実としてあるのではなくて、宇野の頭のなかでの単なる思考産物なのだ。だからいったんこれを受け入れてしまうと、宇野原論からは抜けることができなくなり、しかも他の立場が全く馬鹿らしく見えてしまうという、ある種の宗教的立場に立つてしまうことになるのだ。問題は価値実体の把握であり、宇野はこれを労働生産過程だと考えたのだが、それが誤りなのだ。労働生産過程そのものは歴史的にさまざま形態をまとう。あらゆる社会の共通な要素はもちろん導き出すことは可能であるが、これが社会の実体をなすわけではない。というのも思考における抽象の産物を実体とみなすのはある種のイデオロギイ論にしかならないからだ。そして宇野原論はイデオロギイとして宇野派で

は機能しているのであろう。これでは現状分析など不可能である。

ついでに、最近「宇野理論を現代にどう活かすか」というサイトがあることを知り、論文の目録を見てみたが、リーマンショックを分析した論文は見つけれなかった。宇野派の大御所たちはみな、宇野の真似をしてそれぞれが原理論を作っている。そしてそれぞれの差異についての議論が激しくなされている。これって何かがおかしい。現状分析に宇野原理論が役に立つかどうかという問題ではなくて、あるいはそれぞれの原理論を武器に現状分析にむかうのではなくて、それぞれに打ち立てられた各人の原理論それ自体が彼らにとっては分析すべき対象となってしまっているのだ。こうした錯誤の結果、宇野理論を信奉する経済学者はたくさんいるのに、共同研究すら組織できていないように感じるのは私だけだろうか。

このあと、「4）金融化論について」を予定していたが長くなるので後日にしたい。

## 第2章 社会主義理論学会 6月25日報告 負債経済論

2017年6月25日 境 毅(ルネサンス研究所関西運営委員)

### 第1節 私の負債経済論事始め

#### 1) ラッツアラートとグレーバーに触発されて

長年金融市場における情報の暗号化とその解読に取り組んできたが、昨年やっと、グローバル資本市場での高利資本のヘゲモニーという事態がその核心であることに気づき、グローバル資本市場の歴史を書こうとしていた時に、ラッツアラート『借金人間製造工場』(作品社)に出会った。ラッツアラートによる負債経済論の提起は優れたものであって、急遽その書評もどきの論文を書いた。(『情況』2016年2号) そのあと、グレーバー『負債論』が翻訳されたので、それも読んだ。グレーバーの議論の中で一番響いたのは人類史における負債についての考え方の変遷であり、特に貨幣が出現して以降の負債論のいかがわしさについての指摘であった。

私はすぐそのくぐりを踏まえて「研究へのお誘い：グレーバーを深める」(2017年2月10日)をルネサンス研究所のメンバーに提起してみた。この提起を以下に収録しておこう。

研究へのお誘い：グレーバーを深める 2017年2月10日

(1) グレーバーは『負債論』(以文社)で古代人の負債論について次のように述べている。

自己の存在をなにに負っているか。古代人の考えを現代風に示してみる。(要約)

① 宇宙と宇宙の力、つまり自然。=存在の基盤。「これに対する負債は儀式によって返済される。儀式は小さきわれわれを凌駕する存在すべてへの敬意と承認の行為である。」

② 知識と文化的成果に対して。「それらの人びとに対する負債は、わたしたち自身が学習し人間の知識と文化に貢献することで支払われる。」

③ 祖先に対して。「じぶん自身が祖先となることで返済される。」

④ 人類全体に対して。「異邦人に対する寛容によって、人間的諸関係つまり生を可能なものにする、社会性にかかわる基本的なコミュニズム的土台を維持することによって返済する。」(『負債論』、101~2頁)

「このように整理してみると、議論が前提そのものをむしろはじめる。これらは商業的負債とはなんの関係もない。」(同書、102頁)

「すでに万物を有しているゆえに神々との取引が不可能であるとすれば、宇宙との取引もまちがいなく不可能なのだ。」(同書、102頁)

「人類または宇宙から分離した存在としておのれをみため、こうして一対一の取引を可能であるとする想定自体が、死によってのみ返答の与えられる犯罪なのである。わたしたちの罪責性は、宇宙に対する負債を返済できないことによるものではない。わたしたちの罪責性とはく存在するすべて、またはこれまで存在してきたすべて>と、いかなる意味であれ同等のものであると考えるほどおもしろいあがっているため、そもそもそのような負債を構想できてしまうことにあるのだ。」(同書、102～3頁)

## (2) 負債論の観点からのグレーバーの問題提起

「今日の個人主義的な社会にふさわしいエートスを求めるとするならば、次のようにいえるだろうか。ひとはみな人類、社会、自然または宇宙に対して無限の負債を負っているが、べつのだれかが支払い方法を指示できるわけではない、と。これは少なくとも知的には筋が通っている。もしそうだとすれば、**確立された権威のシステムのほとんどすべて——宗教、道徳、政治、経済、刑事司法体制——をそれぞれ異なる欺瞞の方法とみなすことができる。**それは計算不可能なものを計算できるとうそぶき、制約なき負債のうちのあれこれの部分をかきかきかじかのように返済せよと指令する権限を詐称するにすぎないのだ、と。だとすれば、人間の自由とは、返済方法をどうしたいかをじぶん自身で決定するわたしたちの能力ということになる。

わたしの知るかぎりこれまでこのような発想をした者はいない。実存的負債についての理論は、そのかわり権威の構造を正当化する——あるいは権威の座を主張する——手段に常に堕してきた。」(同書、103頁)

## (3) このすばらしい発想を生かしてみよう。

基本的な人権の目録の再定義が必要だ。人間とは何か、と問うときに「人は、自由、かつ、権利において平等なものとして生まれ、生存する。」というフランス人権宣言第一条の再審が必要である。

すでにフェニズムが指摘しているように、このような人は「ケアレスマンモデル」であり、現在の成人男子のイメージを押し付けたものだ。現実には人はケアされないと生きていけない未熟児として出産され、長期に育成期間を要して男性は「ケアレスマン」(それも家族の援助付きの)となる。グレーバーの指摘に従って、人権宣言を「欺瞞の方法」として批判してみませんか。

実は、当初、本日の報告はこの「基本的な人権論の再審」というテーマにするつもりであった。ところがこのテーマでルネサンス研究所関西の定例研究会で議論したところ、問題は応用問題であって、先に負債経済論についての理解が必要だということが分かった。それで本日のテーマは負債経済論にしている。(ルネサンス研究所での討論は『ASSB』誌24巻6号に掲載してあり、HPで読める。)

グレーバーの議論はほかにも面白いものがたくさんあるのだが、気になったのは貨幣の起源を信用に求める理解である。これについては日本では、楊枝嗣朗が『歴史のなかの貨幣』(文真堂、2012年)に収録されている諸論文を、グレーバーの書籍が原書で出版される以前から、『佐賀大学経済論集』に発表されており、そこに貨幣の起源を信用に求める見解が西欧の人類学者などの見解をもとにまとめられていて、私は、金貨論とならんで信用に貨幣の起源を求める楊枝説の批判についてはずっと課題として来ている。それもあって、2015年と2016年に日本で出版された人類学の業績をもとに、(後藤健『メソポタミアとインダスのあいだ』、筑摩選書、2015年/小泉龍人『都市の起源』講談社メチエ、2016年)貨幣の起源を信用に求める見解が、いずれも古代オリエントの都市の遺跡から発掘された粘土板の楔形文字による貸借記録に根拠を求めているのに対して、私は都市の成立以前に広範な取引のネットワークがあり、そこですでに銀が世界貨幣として成立していたのではな

いかという仮説を提起できた。(『ASSB』誌 24 卷 6 号所収「グレーバー貨幣起源論への疑問」、HP 掲載済み) 以上を前置きとして本日の報告を始めたい。

## 第 2 節 負債経済論入門

### 1) 負債経済の定義

#### (1) 負債経済とは

負債経済とは、グローバル資本市場において、お金にお金を生ませる手段である金融商品の由来が、債務を資本として機能させる近代的利子生み資本とは異なるものによって形成される経済領域を指す。近代的利子生み資本とは異なるものとは、国債があり、また、投資銀行によって消費者金融などの債務の証券化による金融商品が作りだされている。これらは貸し付けた貨幣が資本として機能してはいない、高利資本を根に持つ負債である。これらの負債（債権・債務関係）及びそれに根をもつ金融商品が売買される経済領域（グローバル資本市場も含む）を負債経済と呼ぶ。

#### (2) 二種類の負債

近代資本主義は、他人から借金し、その負債を資本として使用して儲ける機能資本家を生みだした。この借手は従来の借り手である国家や貴族や地主や農民たちと比べてリスクが少なく、貸し手は低利で貸し付けた。近代社会に、根本的に異なる二種類の負債が生まれた。

借りた金で儲ける仕方は古くからあった。古代では海外交易に携わる商人たちがその担い手であり、中世では外国貿易に伴う為替の金融技術も発達したが、リスクが高く、低利の貸付は実現しなかった。

資本主義のもとでの貨幣資本家による機能資本家への貸付は、機能資本家が借りた貨幣を資本として使用し、剰余価値を生産するが、この剰余価値から機能資本家には利潤が、そして貨幣資本家には利子が支払われる。だから利子の大きさは剰余価値を超えられず、貨幣資本家は高利は取れないがしかし貸付額が巨大となるので、低利での貸付が定着した。

つまり負債には二種類あり、借りた貨幣を資本として機能させる場合と、消費の用途にする場合である。後者はかつては国家の戦費や王侯貴族の浪費、飢饉のときの農民の生計費などであったが、現在では消費者ローンとなっている。

#### (3) 負債資本と利子生み資本との区別

従来の高利資本は今日の負債経済の中核的資本となっており、新たに負債資本と名付け、その属性について研究することが必要である。利子生み資本と負債資本、共に外観は貸付けた貨幣に利子がつくというものだが、借りた貨幣がどのように機能しているか、その違いを明らかにするために、借りた貨幣が資本としては機能していない貸付け資本を負債資本と規定しよう。それが単なる高利資本の役割を超えて、現代の資本主義の破局をもたらすような資本として異変をおこしているのだ。

### 2) 負債資本＝現代の錬金術

#### (1) 金融資産は負債である

従来の金融資産

①資本家への融資、株式、社債等の貸し付けた貨幣が資本として機能しているという条件。

②資本としては機能しないが国家によるインフラ等の生産的投資を賄う国債。

③生産力として役立つ土地の地代の資本還元化。不動産資本。

## (2)逆もまた真なり→負債は金融資産である

証券化の技術で、あらゆる負債は金融資産化できる。

今日のその他の負債

④住宅ローン、土地が担保となるリスクの少ない貸付。

⑤自動車ローンなどの耐久消費財。担保あり。信用商品。

⑥カードローンなどの日常生活物資の購入のための借り入れ。商品価格に利子の上乗せ。

⑦国の武器購入（戦費）などの不生産的な用途を賄う国債。

## (3)遊休貨幣資本の麻薬としての負債資本

錬金術によって生み出された負債資本が、膨大な遊休貨幣資本の蓄積によって麻薬のように、今日のグローバル資本市場の存続に不可欠なものとなっている。

①年金基金

②保険

③大企業

④富裕層

⑤種々の投資媒介業とタックスヘイブンなどの装置

## 3) 現代におけるグreshamの法則

グローバル資本市場での負債資本（高利資本の異変体）のヘゲモニー

## 4) 負債資本の歴史的役割

高利資本が封建主義から資本主義への移行期に果たした役割を反面教師とすれば、負債資本は資本主義から次のシステムへの移行の推進役とみなせる。

マルクスの『資本論』第三巻、第36章「前ブルジョア的諸関係」から引用しておく。

「高利は、一方では、封建的（および古代的富）および所有の破壊者として〔作用する〕。他方では、それは、小ブルジョア的、小農民的生産の、要するに生産者がまだ自分の生産手段の所有者として現われているようなすべての形態の破壊者として〔作用する〕。」（大谷禎之介著『マルクスの利子生み資本論』、桜井書店、第4巻、456頁）

「高利は生産手段が分散されているところで貨幣財産を集中する。高利は生産様式を変化させないで寄生虫としてそれに付着し、それを困窮させる。高利は生産様式を吸い尽くし、それを衰弱させ、そして、再生産がますますひどい諸条件のもとで行なわれるようにする。それだからこそ高利にたいする民衆の憎悪が生じるのであり、古代世界ではますますもつ

てそうなるのである。というのは、そこでは生産者が自分の生産諸条件の所有者であることが同時に政治的諸関係の基礎であり、市民の自立性の基礎だったからである。」（同書、457頁）

「資本主義以前のすべての生産様式のもとで高利が革命的に作用するのは、ただ、高利が所有諸形態を破壊し分解するからでしかない。つまり政治的編制はこれらの所有形態の強固な基礎とそれらが同じ形態でたえず再生産されることとにもとづいているのである。

アジア的な諸形態のもとでは、高利は、経済的衰微と政治的腐敗とのほかにはなにもひき起こすことなしに長く存続することができる。資本主義的生産様式のそのほかの諸条件が存在するところで、またそれが存在するときに、はじめて、高利は、新たな生産様式の形成手段の一つとして、封建領主や小生産の没落——資本としての労働諸条件の集中の手段〔——として〕現われるのである。」(457～8頁)

では現在、高利資本が変性した負債資本は、資本主義の墓堀人としての役割をもって登場したとみなせるのか。

## 5) 実践的な課題

負債資本と闘争する新たな運動論構築の必要性

## 6) 負債経済の成立過程

1971年 ニクソンショック

1972年 外国為替市場でのデリバティブ取引の開始

1970年代後半 モーゲイジ(住宅ローン)の証券化

1970年代 ユーロー市場でのシンジケートローンの開発

1980年代 アメリカが通商政策重視から金融政策中心にして新たな世界支配を始めた。グローバル資本市場の形成と発展。

2008年 リーマンショックで負債資本の矛盾が明るみに出たが、以降も麻薬として欠かせない。

## 第3節 グレーバーの問題提起

グレーバーの負債論もラッツアラートの負債経済論も、共にリーマンショック以降に負債について研究した成果であり、ほとんど同時期に出版されている。そして、両者の間に論争もあるようだ。

グレーバーの大著はいろいろな分野にまたがっている。それで、ここではごく一部分になるが、基本的人権論の再審にかかわる部分と、信用論関係についてその概要を紹介しておこう。なお貨幣起源論についてはすでに論じたので省いておく。

### 1) 負債とはなにか

グレーバーの負債論は負債経済論ではなくて負債がもたらすモラルの正当性についての人類学的な視野からの批判である。①負債とは何か「もし歴史の教えというものがあるとしたら、暴力に基盤を置く諸関係を正当化しそれらをモラルで粉飾するためには、負債の言語によってそれらを再構成する以上に有効な方法はないということだ。」(10頁)

冒頭で、負債といっても意味が異なることを、第三世界諸国の負債とアメリカの負債の対比で次のように明らかにしている。②「第三世界の債務国は、ほとんど例外なく一度はヨーロッパ諸国によって攻撃され征服されたことのある国々である。そして多くの場合、かつての侵略国に債務を負っている。」(11頁)しかし、合衆国の負債の場合はどうか。「合衆国の対外債務は、諸外国(ドイツ、日本、韓国、台湾、タイ、湾岸諸国といった)の投資家が所有するTボンド(財務省長期証券)の形態をとっている。そして多くの場合、それらの諸国は合衆国の軍隊によって保護され、赤字財政支出の原因そのものである重装備の米軍基地によって覆われている。・・・中国さえも、非常に多額のTボンドを所有することで、ある程度は合衆国に奉仕させられているのであって、その逆ではないのだ。

では、合衆国財務省に向かって集中をつづける、この貨幣の本質とはなにか?これらは

『融資（ローン）』なのか？それとも『貢納』なのか？」（12 頁）

● 負債とは、暴力に基盤を置く関係を正当化するために利用され、それから派生するモラルをも含む。

● 負債にもいろいろある、第三世界の負債とアメリカの負債のちがひ。後者は貢納。

世界宗教の意味。自由とは歴史的にみるとなにか。⑤「メソポタミアにおいてと同様に、聖書においても、『自由』とは、なによりもまず負債の影響からの解放を意味するようになった。」（123 頁）世界宗教の両義性 「一方で、世界宗教は市場に対する怒号である。ところが他方で、そうした異議を商業的な観点から枠づけてしまう傾向をも世界宗教は有しているのである。」（127 頁）

⑥「では、負債とはいったいなにか？

負債とはきわめて個別具体的な事象である。そして負債は、きわめて具体的な状況から生まれる。それがまず必要とするのは、根本的に異なっている存在とはたがいにみなしていない二人の人間の関係である。少なくとも可能性としては対等であり、本質的な次元において実際に対等であるのだが、現在のところ対等な地位にはない。だが、事態を回復する何らかの方法がある、といった二人の関係である。」（181 頁）「負債が返済されていないあいだ、ヒエラルキーの論理が支配的になる。互酬性は存在しない。」（182 頁）「かくして負債とは完遂にいたらぬ交換にすぎないのである。」（183 頁）

● グレーバーは世界宗教が掲げた「自由」が負債からの解放であることに注目している。

● 負債は対等な人格のあいだに一時的に隷従関係をつくりだす。しかし、これは奴隷とも賃労働とも異なる隷属関係である。

## 2) 原始貨幣と負債、その関係の変化

グレーバーは世界宗教登場以前の、それも都市が成立する以前の部族的共同体における貨幣の役割を論じている。⑦「起源における『原始貨幣』は、いかなる意味でも借りを返す方法ではなかった。どうやっても支払い不可能である負債の存在を承認する方法だったのである。」（200 頁）「実のところそれは、どのような支払いも不可能なほどかけがえのない価値あるものを要求していることの承認なのだ。女性の贈与に見合う支払いは、ただひとつ、べつの女性の贈与のみである。それまでは、ひとができることといえば、ただ、その未払いの負債を認知することだけなのである。」（201 頁）

ではそのような原始貨幣が、どのようにして取引の手段となり、その結果は何をもたらしたのか。⑧「人間経済においては、なにかを売ることができるようにするには、まずそれを文脈から切り離す必要があるのだ。奴隷とはまさしくこれである。すなわち、奴隷とはじぶんたちを育てあげた共同体から剝奪された人びとのことである。」（222 頁）⑨「かつては尊厳を測定することに使用されていたおなじ貨幣が卵や散髪に支払うために使用されはじめると、その経済になにが起こるのか？古代メソポタミアや地中海世界の歴史があきらかにするように、その結果は根底的かつ永続的なモラル上の危機であった。」（266 頁）

● 原始貨幣は、とても返せはしない負債の象徴だった。これが取引に使用されるようになったのは、人間の奴隷化から始まり、それはモラル上の危機を招来した。

人間経済から商品経済への移行にあたっての負債の役割。⑩「これまで強調してきたように、歴史的にみると、戦争と国家と市場はすべてたがいに育み合う傾向にある。征服は徴税につながる。徴税は市場を創設する手段となる。市場は兵士と行政官にとって好都合である。メソポタミアの事例にかぎって言えば、こういったすべてが負債の爆発的上昇と複雑な関係をもち、負債の爆発的上昇はあらゆる人間関係——その延長で女性の身体——を潜在的商品に変容させる脅威をもたらしていた。」（270 頁）⑪「メソポタミアの夫も妻を売ることではできなかつた。あるいは通常はできなかつた。ところが夫が借金に頼ってしまったとき、すべてが一変する。というのも借金となれば、そのために妻子を抵当に入れることは——みてきたように——完全に合法であり、返済できなければ、まさに奴隷や羊や

山羊とまったくおなじように、債務の人質である妻子を奪われる可能性があったのだから。このことはまた、名誉と信用が実質的に同一のものになったことを意味する。少なくとも貧しい男にとって、じぶんの信用価値とは、まさにみずからの世帯に対する統率力であった。そして家庭における権威ある関係、すなわち原則として配慮し保護する責任であるような関係が、実際に売買可能であるような所有権となったのである。」(272 頁)

● 人間経済から都市国家への移行。戦争は奴隷を生む。征服は徴税を生み、市場を生む。モラル上の危機→世界宗教の誕生。

### 3) 負債の問題の解決方法での古代ギリシャの特殊性

⑫「古代中東における抵抗は常に、反乱の政治というより大脱出の政治、つまり共同体や家族とともに——しばしば連れ去られてしまう前に——逃散することの政治である。」

(276 頁)「世界中の聖典——旧約聖書、新約聖書、コーランをはじめ中世から現代にいたるまでの宗教文学など——は、腐敗した都市生活に対する軽蔑と商人に対する疑念、そしてしばしば強烈な女性嫌悪症の合体からなる、この叛逆の声を反響している。」(276 頁) ⑬

「ほとんどの都市(ギリシャの)が最終的にみいだした解決策は、近東のそれとは大きく異なるものであった。定期的な恩赦を制度化するかわりに、ギリシャ諸都市は負債懲役制度を制限するか全面廃止する方向にむかい、次いで将来の危機を防ぐため〔領土〕拡張政策をとり、貧者の子供たちを送り込んで海外に軍事的植民地を確立したのである。またたくまにクリミアからマルセイユまでの沿岸全体にギリシャ人都市が点在するようになり、今度はそれらの都市が活発な奴隷貿易の流通経路としての役割をはたすようになった。奴隷の急増は、転じて、ギリシャ社会の性格を徹底的に変質させた。なによりも、つつましい生活を送る市民さえも都市の政治的・文化的生活に参加できるようになり、真の市民的意識を抱くようになったのである。だがこのことが旧貴族階級をして、新しい民主国家の卑俗性やモラルの荒廃と彼らの眼にはみえたものからみずからを遠ざけるべく、ますます手の込んだ手段を発展させるように駆り立てたのである。

ギリシャが真の幕開けをむかえる前 5 世紀には、だれもが金銭について議論していた。現存するほとんどの文献の執筆者たちは貴族であるが、彼らにとって金銭とは腐敗の化身であった。貴族たちは市場を軽蔑していた。名誉ある男たちの理想は、必要なものすべてをじぶん自身の地所で調達し、現金をいっさい手にしないことだったのだ。」(282 頁)「いずれの場合も貴族たちは、贈与と気前のよさと名誉の世界をあさましい商業的交換の上位に位置づけたのである。」(282 頁) ⑭「アテナイでは、その帰結は手のつけようのないモラル上の混乱であった、貨幣、負債、金融の言語が、モラルの問題についての強力な——かつ最終的には抵抗しがたい——思考法を提供したのである。人びとは、ヴェーダ時代のインド同様、生を神への負債ととらえ、義務を負債と考え、名誉の負債〔信用借り〕を文字通りに信じ、負債を罪悪、復讐を負債の回収とみなしはじめた。」(294 頁)

● 債務帳消ではなく、海外の植民地形成と奴隷の確保という帝国主義を展開したという、古代ギリシャについてのこのような考え方は専門家にとってはどうなのか。

### 4) ローマ法とは

さて、現代の私有財産制度の法的モデルであるローマ法についてはどうか。⑮「ローマ法において、所有すなわちドミウムとは、人が物に対して持つ絶対的権力によって特徴づけられる『人と物との関係』である。この定義は、はてしの概念上の問題を引き起こしてきた。まず、生命をもたない物体と人間が『関係』をもつことがどういうことか、はっきりしない。人間どうしは関係をもつことができる。だが、その関係は常に相互的なものだ。では、物と『関係』をもつとは、いったいどういうことか?・・・そこにほかにだれもいなければ、所有権についておもしろい悩む必要などないからだ。

すると、所有とは人と物の関係などではないことはあきらかである。それは、物にかんする人びとのあいだの了解あるいは取り決めなのである。」(299 頁)「しかし、無理からぬことであるが、ひとり人間と地球上のそれ以外の全員のあいだの関係を、それそのものとして把握することは難しい。物との関係として考える方がずっとかんたんなのである。」(299 頁) ⑩「絶対的私的所有という観念は奴隷制に由来している。つまり、所有を人間どうしのあいだの関係ではなく人間と物とのあいだの関係として想像するには、どちらかの一方が物であるような二人の人間どうしの関係を出発点とすればよい。」(301 頁) ⑪「ローマの法学者たちがなによりもまずおこなったのは、家庭内の権威の原理、すなわち人間に対する絶対的権能の原理を取り込み、そういった人間の一部を物として定義し、もともとは奴隷に対して適用されていた論理を、ガチョウや馬車や納屋や宝石箱などなどに、つまり法律が関与するすべてにまで、拡張することであった。」(303 頁)「しかしながら、ローマの奴隷制による浸透力ある悪影響の最たるものは、ローマ法を通じて、人間の自由についてのわたしたちの観念に大混乱がもたらされたことである。・・・古代世界のどこにおいても、『自由』であることはなによりもまず奴隷ではないということの意味していた。」(306 頁)

● ローマ法の所有を「人と物との関係」とみる見解の起源。所有とは本来人と人との関係であるが、これを想像するよりも一方の人格を物化し、人一物関係に換算したほうがたやすい。そのモデルは奴隷制。

● 絶対的私的所有は、モデルである奴隷制における所有関係の一般化。

ローマ法を継承した現在の自由論の限界。⑫「自由とは原理的にみずからの所有物についてなんでも好きなことをする権利であると考えた伝統は、まさにこれなのである。実際には、その伝統によれば所有は権利とされるだけにとどまらず、権利それ自体が所有の一形式とみなされるのだが、ある意味でこれは、逆説中の逆説である。」(309 頁)「賃労働、それは実質的には、奴隷制が自由の売却とみなしうるように、自由の貸与なのである。」(311 頁)

⑬「ここでようやく、じぶん自身を主人であると同時に奴隷として定義するわたしたちの奇妙な習慣について、みずからの自由の主人としての自己とか、じぶん自身の所有者としての自己とか、そのような概念でもって古代の世界の最も野蛮な側面を複製しているわたしたちの奇妙な習慣について、つまるところいったいなにが問われているのかがみえてくる。これこそが、わたしたち自身を完全に孤立した存在として想像しうる唯一の方法なのである。」(316 頁)

● 自由権の変容。隷属からの自由が、私的所有物の自由処分権に矮小化された。

## 5) 資本主義の始まりと負債との関係

グレーバーは、信用貨幣の時代と鑄貨の時代が交互に出現しているとする。最初の鑄貨の時代を枢軸時代にみ、再度の信用貨幣の時代を中世にみ、二番目の鑄貨の時代を初期資本主義の金本位制にみ、そして三度目の信用貨幣の時代を現在にみている。鑄貨の時代は戦争の時代であり、信用貨幣に時代は政治的には安定した時代だという。そしてこの変遷によって、日常の経済生活（貨幣や負債についてのモラル）と宗教との関係を考察している。これについてはここでは言及しないが資料⑭～⑯参照。また中世の特徴については、資料⑰～⑲参照。

資本主義はどのようにして始まったのか。⑰「したがって、資本はたんなる貨幣ではない。貨幣に転化する富ですらない。とはいえ、貨幣を用いてさらに貨幣をつくるべく政治権力を利用することでもない。・・・だが、貨幣は一貫して政治的道具でありつづけた。帝国が崩壊し軍隊が解除されると、装置全体があっけなく雲散霧消したのはそのためである。ところが、新たに擡頭してきた資本主義的秩序のもとでは、貨幣の論理に自律性が与えられた。政治的・軍事的権力は、徐々にその貨幣の論理の周辺に再編成されるようにな

る。これこそが、国家と軍隊をそもそも背後に抱えていなければ決して存在しえぬ金融の論理だったのだ。」(474頁) ⑳「それゆえ、資本主義の起源の物語は、市場の非人格的力による伝統的共同体の段階的解体の物語ではないのである。それはむしろ、信用の経済がいかにして利益の経済にて転換されたのかという物語であり、非人格的——でしばしば報復的——な国家権力の侵入によってモラルのネットワークが段階的に変容させられていく物語なのだ。」(491頁) ㉑「銀行家によって中世国家がうまく統治されていたところでは、政府の財政を操作することは、より安全でより利益を生むことがわかっていた。近代的金融手段の歴史そして紙幣の究極の歴史は、地方債発行とともに始まった。この慣行は、納税市民に強制融資を課し、それぞれに年率5パーセントの利子を約束し、『債券』または契約を交渉可能事項とすることで国債による市場を創設したのである。」(499～500頁)「16世紀までに、すでに商人たちは為替手形を利用して負債を決済していたものの、政府の諸々の債券——ラント〔フランスの利付国債〕、フーロス〔スペインの年金型債券〕アニュイティ〔年金〕——こそが新時代における真の信用貨幣であった。」(500頁) ㉒「イングランド銀行が創設されたのはロンドンとエディンバラの商人40人——その大部分がすでに国王への債権者であった——からなる協会が、対仏戦争を援助するため、国王ウイリアム三世に120万ポンドの融資をおこなったときであったことをおもいだそう。その見返りとして銀行券発行を独占する株式会社を許可するよう、彼らは王を説得した。そして、その銀行券は、事実上、王が彼らに負っている額面の約束手形だったのである。これが世界初の独立した国立中央銀行であり、それは小規模の銀行間でやりとりされている負債の手形交換所となった。その手形が、まもなく、ヨーロッパ初の国家紙幣に発展していくのである。」(501～2頁) ㉓「ここでわたしたちは奇妙な逆説に直面する。資本主義と関連づけられるようになった金融装置を構成するほとんどすべての要素——中央銀行、債権市場、空売り、証券会社、投機バブル、証券化、年金といった——が、経済学という科学のみならず、工場そして賃労働にさえ先だって出現していたのである。このことはおなじみの見方に対する真の挑戦である。」(509～10頁)

「かつて人びとに身の周りのすべてを潜在的な利潤の源泉としてみることを強制していた非人格的な仕組みだったものが、人間の共同体それ自体の健全性を判断する唯一の客観的な尺度と考えられるようになったのだ。

わたしたちの基盤となる日付である1700年を出発点としてみるならば、近代資本主義の黎明期に現れるのは信用と負債の巨大な金融装置である。」(510頁)

● 資本主義は市場の非人格的力によって共同体を解体してくることで生まれたわけではない。中世に形成されていた負債経済＝信用制度を統治の仕組みから利益の仕組みへと改変されたことによる。

## 6) 現代の資本主義と負債

現在の資本主義は、ニクソンショックで信用貨幣の時代になっているが戦争は絶えない。これについては資料⑳, ㉓参照。ここでグレーバーはドルの発券システムについて明らかにしている。㉔「ドルを変動化することによってニクソンは、合衆国通貨を純粋な『法定不換紙幣』——合衆国政府がそう主張することによってのみ貨幣として扱われる内在的価値のないただの紙片——へと転換させた。そう多くのひとが考えている。だとすると、いまや合衆国の軍事力のみがその通貨を支えているのだと主張することもまたできよう。ある意味でのこの主張は正しい。しかし『法廷不換紙幣』という観念は、貨幣はもともと金で『あった』ということをも前提としている。ところが、本当のところ、わたしたちが目にはしているのは、信用貨幣の新手の変異体なのである。

一般的に信じられていることとは逆に、『好きなときにお札を刷る』ことを合衆国政府はできない。なぜならアメリカの貨幣は、連邦政府によってではなく、連邦準備制度の保護のもとで、民間銀行によって発行されるからである。連邦準備機関は——その名称にもか

かわらず——特殊な形態の官民混成体であり、いくつもの民間銀行の共同事業体なのだ。運営委員会こそ議会の承認にもとづいて大統領に任命されるものの、それ以外は自律的に操業されているのである。アメリカで出回っているすべてのドル紙幣は『連邦準備銀行券』である。つまり連邦準備制度がそれを約束手形として発行し、それぞれの紙幣に4セントずつ支払って合衆国造幣局に印刷を委託する、というものである。このような仕組みは、もともとイングランド銀行によって開発された図式の一変異体である。つまり、連邦準備制度が財務省長期証券を購入することによって合衆国政府に金銭を『貸付け』、それから政府が負っている（政府の借金である）額面を他の諸銀行に貸し付けることによって、合衆国の負債を貨幣化するのである。」(539頁) ㉔「合衆国の軍隊は、それ以外のどの軍隊とも異なり、グローバルな権力掌握を指針としつづけている。海外に設置されたおおよそ800の軍事基地を通し、地球上のどこへでも強靱な力で介入するべし、なる指針である。」(541頁) ㉕「このように、自由に変動するドルの登場から直接にもたらされた諸々の帰結は、資本主義自体がそもそも基礎をおいていた戦士と投資家の同盟との決別ではなく、むしろその究極の神格化とでもいうべき事態を示している。またその仮想貨幣への回帰が、名誉と信頼の諸関係への大いなる回帰にみちびかれることもなかった。現実はその真逆である。だが、わたしたちがいま問題にしているのは、これから何世紀もつづくであろう歴史的時代の端緒である数年なのだ。」(544頁)

● グレーバーは貨幣の起源を信用に見たが、金貨論には組してはいない。貨幣金がどのように扱われ、そしてドルという銀行券の発券がどのようになっているかを調査して述べている。ドルが基軸通貨として存在することで、ドル(国債)がアメリカの負債を膨張させるために過剰に発行されているが、それが貢納の仕組みであるとすれば、危機とは言えない。

## 7) 現在の負債経済は何が問題か

では、現在の負債経済の問題点は。㉖「この帰結については、包摂の危機と呼ぶことができるかもしれない。1970年代の後半には、現存する秩序があきらかに崩壊をはじめ、財政混乱、食料暴動、石油危機、成長の終焉や生態系の危機をめぐる終末論の横行などに同時に悩まされるようになった。やがてあきらかになったように、これらすべてが、それぞれの仕方で、民衆に対してこの契約の果たされぬことを告知していたのである。」(554～5頁) ㉗「新しい分配体制においては賃金はもはや上昇せず、そのかわり労働者たちは資本主義の断片を購入するよう奨励されるようになった。金利生活者を安楽死させるかわりに、今や万人が金利生活者になることができるというわけである——実質的には、劇的に高まっていくじぶん自身への搾取率が生みだした利潤のわずかの断片を分けてもらえるということだったのだが。」(555頁) ㉘「いまや万人が負債を抱えているという事実(合衆国の家庭の負債は今や収入の130%平均という推定である)この負債が競馬で一発あてようとしたとかぜいたくしたといった理由でかさんだものでないという事実である。それは、経済学者たちが裁量消費支出と呼んでいる出費のために借りたもの、つまり、主要には子どもに与えられ、友人たちと共有され、あるいはさもなくば他者との関係——要するに単なる物質的計算以外のなにかを基盤にした関係——を構築したり維持したりするためのものである。いまやひとが単なる物理的生存を超えた生を獲得するためには、負債に依存せねばならないのである。」(560頁) ㉙「わたしたちは、いま、真に特異な歴史的転換期を生きている。信用危機は、前章で提起した原理、すなわち、資本主義はそれが永続するであろうと人びとが信じる世界においては機能することはできないという原理を、生々しく描写している。」(563～4頁)

● 万人が負債を抱え、その負債は生活のために必要な財の購入のためである。その負債を資産として活用することで、万人が金利生活者になれるという幻想。このような世界はこの世界が永続すると万人が考えた時にリーマンショックのような破局を迎える。危機で

あると万人が考えていると破局は回避される。

このような危機があるにもかかわらず、社会運動の展望を見出せず、抵抗運動が勝つことはないという意識に追い込む執念に負けてしまっている。生み出されているのは、恐怖と愛国主義的順応と、絶望感。④「いいかえると、すべてを管理する唯一の方法として資本主義を制度化せねばならないという政治的義務と、投機が統制不能な混乱におちいらないうその未来の地平を限定せねばならないという資本主義そのものの公認されざる必要性のあいだに、深刻な矛盾があったのだ。そしていったん制御不能の混乱が起こるや、機械全体が内破し、わたしたちは、事態を建て直すそのようなべつの方法をも想像することさえできないという奇妙な状況に取り残されたのだ。わたしたちが想像することのできる唯一のものは、破局である。」(565～6頁)

● 危機だと認識すると破局が回避され、永続すると考えると破局となる、このような現在の状態は社会運動を混乱させている。破局とは支配者側も非支配者側もどうしていいかわからない状況のことであり、今がまさにそうだ。

## 8) 負債のモラルから脱却するために

グレーバーの追求した新しい思考。⑤「本書でわたしが試みたのは、次代の展望を提示することではなく、わたしたちの視野を開放し、わたしたちの可能性についての感覚を拡大することであった。つまり時代にふさわしい大きな尺度と規模で思考を開始するとはどういうことか、問いかけはじめることである。」(566頁) ⑥「市場は、ひとたびみずからの暴力的起源から完全に手を切ることができるようになると、きまって別のものへと、たとえば名誉、信頼、相互的紐帯などの織り成すネットワークへと成長していく。」(571頁)

結論として、負債のモラルは、宇宙秩序に負債を負っているという考えにもづき自身の存在基盤と交渉できるという間違った考えに基礎をおいている。逆に世界こそが、あなたから生を借りている。⑦「わたしにとって、まさにこれこそ(金融の命法)が負債のモラルリティをかくも邪悪にしているものなのである。すなわち、金融の命法が、たえずわたしたちを、好むと好まざるとにかかわらず、たんにカネになるものとしてしか世界をみない略奪者もどきへと還元している、そのやり方である。」(575頁)「現在の経済秩序がはらんでいる自己破壊衝動を共有しようとしなさい、新しい経済秩序の先駆者」(576頁) 借金は返すべきというモラルへの批判。この原理が破廉恥なウソだった。「つまるところ負債とはいったいなにか? 負債とは約束の倒錯にすぎない。それは数字と暴力によって腐敗してしまった約束なのである。」(578頁)

真の自由: 「いかにしてわたしたちは、それを発見することのできる場所にまでたどりつくのか、である。」(578頁)

● 自由についての再審が必要である。左翼はこれまで自由に否定的だった。しかし、自由の中身を隷属からの解放と考えれば、今こそ自由は負債からの解放として、近代初期の自由(身分的隷属からの解放)とは別の意味で高く掲げられるべきではなかろうか。

## 第4節 ラッツアラートの問題提起

私はリーマンショック以降の信用論研究で、信用資本主義の原理をまとめたが、その数年後には翻訳書や日本の研究者の業績によって、リーマンショックの内実もやっと明らかにされてきていて、それでグローバル資本市場での高利資本のヘゲモニーという観点に行きついた。その時点では、近代的利子生み資本と高利資本との違いという観点から批判をおこなおうとしていた。しかし、ラッツアラートに出会って、そのような枠組みではなくて、負債経済論という枠組みの方がはるかに現実的だと悟ったのだ。彼の問題提起の主要なものを箇条書きにしておこう。(引用は『借金人間製造工場』、作品社)

## 1) 資本・賃労働関係から、債権・債務関係へ

まず、新しい階級関係について、資本―賃労働関係ではなくて、債権者―債務者の関係をあげ、①「“債権者／債務者”関係は、搾取と支配のメカニズムやさまざまな関係性を横断して強化する。」という。そして主体としての債務者について、②「本書が提起しようとするのは、〈借金人間〉を経済的・主体的に製造する系譜の探求である。」と述べている。

このような階級関係を内包した経済を負債経済と呼びその特徴を次の点に求めている。③「負債の経済学は、『負債』という言葉の古典的な語義からして『自らへの働きかけ』をうながし、労働を二重化する。したがって、経済と『倫理』が一緒に機能する。」(21～2頁)

このような負債経済によって、④「国民だけでなく、企業もまた餌食にされている。」(32頁)し、また負債経済への入り口は、⑤「われわれは、消費を通して、それと知らずに〈負債経済〉に日常的に取り込まれている。」(33頁)というところにある。

● 負債経済とは、債権者・債務者の関係が生産過程の主要な特徴となった経済。この経済は従来の階級間を横断する。この経済では労働が二重化され、経済と倫理が一緒に機能する。

● 負債経済への入り口は消費にある。

このような負債経済の現実をみると金融化についての別の定義が必要となり、⑥「一般に『金融化』と呼ばれるものは、投資の資金調達の様態というよりも・・・債権者／債務者関係——の巨大な管理装置を意味するのであり、これは証券化の技術によって行われるのである。」(38頁)

そうだとすると、金融資本主義という定義も再考すべきで、⑦「政治的に見れば、〈負債経済〉の方が、金融経済、あるいは金融資本主義よりも適切な表現のように思われる。」(39頁)と述べている。

● もはやこの負債経済における信用は金融とはいえず、金融資本主義とも言えない。

## 2) 借金人間という主体

この負債経済における危機とはどんなものだろうか。まず、⑧「現在の危機が、金融と生産の分離、いわゆる『ヴァーチャル経済』と『実体経済』の分離に由来するものではなくて、債権者と債務者の権力関係の表現であること」(40頁)次に、⑨「負債は成長にとって不利な条件ではない。逆に、それは現在社会の経済的・主体的な原動力である。」(40頁)とすれば、やはり借金人間という主体の考察が必要となる。

借金人間は特殊な権力関係になかに置かれていて、⑩「クレジットあるいは負債、そして債権者／債務者の関係はある特殊な権力関係をなし、主観性の生産と統制の特殊な様態(『経済的人間』の特殊な形態としての〈借金人間〉)をもたらす。」(46頁)つまり、借金人間とは負債経済によって、主体の主観性を形成させられている受動的な存在なのだ。

● 主観的主体性という訳語の意味。ドゥルーズ・ガタリ『アンチオイディプス』で分析されたのは、現在の経済で主体の主観性がどのようにかたちづくられているかということ。戦後の主体性論とは逆の立場。つまり主体の主観性が資本主義によって加工されているということ。借金人間は負債経済によって、どのような主観をつくりだされているか。

では負債経済という問題提起によって、どのような事柄がみえてくるかと言えば二つある。⑪「負債の中に社会関係の始まりを見るということは、二つのことを意味する。

一つには、経済や社会の始まりを平等を前提とする商売的交換のなかにはなく、力の非対称性のなかに見るとということ、・・・・・・

もう一つは、負債から始めるということ、経済を直接的に主観に依拠したものとして捉えることを意味するということである。」(50頁)

借金人間についてもっと詳しく規定するならば、⑫「現代資本主義の主観的主体性のパ

ラダイムをなすのは、負債であり、……。主観的主体性を立ち上げ、飼い慣らし、製造し、調整し、造形するのは負債なのである。いかなる仕掛けで、負債は主体を製造するのだろうか？」(56頁)そして、それは未来との関係で独特の主体の主観性を形成する。⑬「現在企てられているいかなる金融改革も、目的は一つしかない。すなわち、未来を対象化しながら、未来に先駆けて体制を整えることである。……。かくして<負債経済>は、賃金労働者の雇用時間のみならず、人びとの使う全体の時間をわが物とする。」(65頁)

● 借金人間は未来をさしだし、生きている時間全体をさしだす。

知識集約産業における非物質的労働としてのコモンの囲い込み論にもとづいて、コモンの取戻しを運動の原動力とみなす考えについては否定的で、⑭「いわゆる知識集約産業は、認知資本主義の理論が言うような階級的諸関係を包含するものではない。……。それは、逆に<負債経済>の指令には従属する(文化や教育、サービスなどへの認知的領域への投資の突然のカット)。いずれにしろ、階級闘争の始まりは、資本にとっても被統治者にとっても、知識経済から生じるのではない。」(70頁)と述べている。

● ネグリのコモンの奪還という路線への批判。

さらに現在の負債経済とキリスト教における負債論との対比が試みられている。⑮「キリスト教による『内面化された負債』がまだ超越的な性質を持っていたのに対して、資本主義体制においては負債は『内在的』な存在になる、ということである。キリスト教が宗教のなかに導入した無限を、資本主義は経済的な次元で最発明する。お金がお金を生み出すという価値の自動運動としての資本主義の動きが、負債のおかげでその限界をなくしていくのである。」(104頁)

● キリスト教については私には理解が及ばない。

では賃金労働者はどのような闘いを展開すべきだろうか。⑯「賃金労働者の要求と購買力は再領土化が切断される地点にもなりうるし、従属の拒否を体現するものでもありうる。資本がお金(支払い手段)を資本に変えるのと同じ仕方で、プロレタリアは購買力の流れで自立的で独立した主観的主体化の流れに、資本の政治を遮断する流れに、つまりおのれが押し込められている従属的機能の拒絶——そこからの逃走——の流れに変えなければならない。」(111頁)

### 3) 負債経済の危機と主体の闘い

以上のような負債経済論からすれば新自由主義の位置づけも変化してくる。⑰「現代の新自由主義政策は、賃金を抑止し(デフレを“口実”に)、福祉支出を大幅にカットしながら、人間資本、あるいは大なり小なり負債を負い、大なり小なり貧しい——そして常に不安定な——『自分を経営する企業家』を生産する。」(124頁)つまり借金人間の主観を企業家としてのそれにしつらえているのだ。

● アメリカやフランスとは違って、日本では自己責任は問われるが、企業家になれという教育は中心ではないようだ。

では負債経済の危機とはなにか。⑱「したがって、われわれが経験している危機は単なる金融危機ではなくて、新自由主義の社会的統治力の失敗である。企業と所有個人主義に依拠した統治様式は破産した。危機は権力関係の本質をあらわにしなが、よりいっそう抑圧的かつ権威主義的な統制の形態に行き着こうとしている。」(140頁)⑲「金融は、社会的諸権利をクレジットに、個人保険に、金利収入(株主)に、要するに個人的所有に変える戦争機械である。すべてを銀行に託しなさいというわけだ。金融は、あなた方みんなをクレジット・カードを持った消費者に変えるための、もっとも精巧な技術を見つけたのである。破綻を導くのは『投機』ではない。金融と実体経済の分離といわれるものでもない。そうではなくて、『私的所有の体制を変えることなく、すべての人を豊かにする』などという主張にほかならない。」(144頁)⑳「つまり、銀行や<負債経済>の権力システムを救うために、山のように積み重なった負債をだれが払うのかという問題である。新自由主義権

カブブロックの答えは言うまでもない。国家や國民に押し付けるということだ。しかし状況は、もはや新自由主義の未熟な魔法使いたちでは、コントロールできなくなりつつあるのだ！」(146頁)

● 個人を企業家とし、金融資産としての負債を背負わせ、その負債の不良資産化によるつけを国家に払わせるというマジックの破綻。

こうして負債経済の危機とは、経済危機ではなくて、政治的危機を含んだカタストロフ（破局）として進行している。その様相は次のごとくである。⑳「私的負債は、常に国家の超越性の介入を必要とする。最終的に私的負債の循環を可能にし保証するのは、市場ではなく国家の負債である。たとえば、貨幣（造幣）の私企業家（民営化）は新自由主義者よりも恐れるもの、すなわち国家の力の介入に必然的に行き着く。これはまさしく、現在の危機が明らかにしていることだ。クレジット（信用）＝通貨の私的発行は、必ず国家の介入を呼び寄せる。なぜなら、私的負債は内在的な調整（市場の自動調整）がきかないからである。そしてそのとき、資本主義の途轍もない『狂気』を示す驚くべきことが出現する。つまり、国家の負債が、債権者（貸し手）とその代表者による投機と搾取の対象となり機会となるのである。彼らは、明らかに彼らに救いの手を差し伸べてくれたものを、システムティックに破壊しにかかる。民衆統制の基盤の一つ、国民国家とその行政府を掘り起こすこの『狂気』を、われわれはどう考えたらいいのだろうか。私は国家の消滅を惜しむものではないが、これはそれですむ話ではない金融危機に次ぐ金融危機、われわれは永続的な危機状態に入っているのである。この単なる“危機”という概念ではとらえきれない状態を、“破局”と呼ぶことにする。」(175頁)

● 経済危機ではなくて破局。危機は必ず好転するが、破局には好転の兆しがない。

#### 4) 社会の未来像とその獲得のための方策

現在の危機が破局だとすれば、それへの対応は次のようなものとなる。㉑「ここにおいて階級闘争は、富の二つの『社会化』のモデルの対立として表現されることになる。すなわち、“すべての人の権利と相互扶助”対“クレジットと個人保険”。崩壊するのは、すべての人を『人間資本』に、自らを経営する企業家に変えようとする政治計画である。」(144～5頁)

● 富の社会化の二つのモデル。

では、“すべての人の権利と相互扶助”を求める運動の方向性はどのようなものか。まず相手側の手段についてきっちり見ている。㉒「彼ら（規範社会学）によると社会的隷属は、規範や規則、法などによって機能するのだが、実際の隷属はむしろこれとは全く逆に、技術的な手順、手続き、使用法など、行動や反応を求めない非意味的な記号によって機能するのである。」(187頁)

そのうえで、どうすべきなのか。㉓「現在の搾取と支配の関係以外のどこから、『誤り』の理由と『紛争』の条件が出てくるだろう？負債が描き出すネガは、新たな主体化の形態と新たな生の可能性を発案するために闘争が方向転換しなければならない歴史的諸条件を規定する。いつの時代にも生じるこの方向転換の諸条件は、そのつど、歴史的・特異的・特殊である。そして今日、それは負債を中心にして結び合わされているのである。

最も緊急に求められる試みは、工業社会の中でストライキが有していた封鎖の有効性をもつような闘争様態を想像し実験することである。資本主義の司令部の脱領土化の現状は、われわれにそれを強いる。資本家と統治者の頑迷な頭には、危機の言葉と闘いの言葉しか届かない。」(202～3頁) ㉔「階級闘争をうまい具合に再開する、つまり最も効果的なやり方で再開するには、負債との関係でこの『第二の無垢』が必要とされる。神への負債に対する第二の無垢ではなくて、地上の負債、われわれの財布にのしかかり、われわれの主体性を鋳型にはめる負債に対する第二の無垢だ。したがって問題は、単に負債を帳消しにしたり破産宣告をするということではなくて——仮にそれが非常に有用な場合でも——われ

われが負債によって閉じ込められている、負債とそれに関わる言説の道徳の檻から脱出することである。

われわれは負債との関係で、われわれを正当化することを試みながら多くの時間を費やしてきたが、今までの考え方ではどんなに正当化しても、すでに正当化しきれない状態に置かれているのである。この第二の無垢を獲得して、いっさいの罪悪感、いっさいの義務、いっさいのやましさを自らを解き放ち、一銭たりとも返済しないという心構えをつくらねばならない。負債の帳消しのために闘わなければならない。もう一度思い起こしておこう。負債とは、経済問題でなく権力の問題であり、われわれを貧困化させるだけでなく、われわれを破局に導くものなのである。」(204～5頁)

● 従来の階級闘争観と階級闘争からの転換が必要。かつてのストライキを持ったような闘争方法を考え出すこと。

● 階級闘争を再開するための思想的課題としての「第二の無垢」。単に債務帳消しにするだけではなく、自らが陥っているモラルの罟から抜け出すこと。

## 5) 階級闘争論の後日の展開

なお、彼の階級闘争論は、『資本の専制、奴隷の反逆』(航思社)所収、廣瀬純によるラッツアラーインタビュー「資本の戦争的本性とその回帰」では資本が暴力階級となって、国内戦争が展開されているとみるようになってきている。闘争論のところを引用しておこう。

②⑨「今日の植民地戦争はかつて『第三世界』と呼ばれてきたような外部にたいするものではもはやなく内部に対するものとなった。」(63頁)

③③「今日の資本はいっさいの媒介を経ずに住民との直接的な対峙に向かう。」(69頁)

③④「極右政党の登場、階級闘争の激化「しかしこの状態からどう脱出すれば良いのか誰にもわからない。誰も解決策を構想し得ていない。」(70頁)

③⑤「資本と闘い得るだけの『戦争機械』をどうすれば作り出せるのか、資本と闘うためにはどのように階級構成を組織化すればよいのかという問題は、68年以來ずっと未解決にとどまり続けています。」(71頁)

③⑥「シリザやポデモスの登場は興味深くはありますが、しかしやはりそれはあくまでもひとつの段階にすぎず、問題はいかにしてその先に進むかという点にあります。新たな階級構成を把握し、それにふさわしい組織化形態を見出さない限り、ぼくたちはいつまでも守りから攻めへと転じることはできない。40年間ずっと、ぼくたちは資本からの一方的な攻撃に曝され続けており、何ひとつ勝ち取っていない。」(72頁)

③⑦「今日の資本による戦争はまさしく社会民主主義の不可能性、改良主義の不可能性、進歩の不可能性によって定義されます。資本がぼくたちに対して展開する戦争は、進歩によってもたらされる富をみんなで分かち合うということそれ自体を不可能にするものとしてある。」(74頁)

③⑧「今日起きていることはしたがって1930年代に起きたことのカリカチュアの反復だとも言えるかもしれない。すなわち、経済危機があって、それが住民の生活に大きな打撃を与え、その帰結として極右が台頭するという流れであり、これがヨーロッパ全土にみられるということです。」(76頁)

③⑨「新たな階級構成、新たな資本形態(金融資本、負債)、新たな戦争形態。これら三つの要素をしっかり把握した上でそのただなかでいかにして動くべきかを考えなければなりません。残念ながらぼくたちはそのずっと手前で足踏みし続けている。今日、政治を構想し得ているのは資本家たちだけであり、かれらには40年前からしっかりした戦略がある。これに対してぼくたちはいまだに何ももっていないのです。ぼくたちにあるのは政治的不能であり、加えて理論的にも不能にとどまっている。」(77頁)

④⑩「これまで『住民』としてぼくが論じてきたのはこの新たな階級構成のことであり、負債政治がその攻撃対象としているのはこの新たな階級構成であって、従来の労使関係はも

はや問題になっていません。今日の資本は金融資本であって産業資本ではないからです。金融資本は経済的＝政治的＝メディア的装置を通じて『住民』全体にたいして力行使する。攻撃されるのは労働者だけではなく、失業者も不安定労働者も年金受給者も含む『住民』全体なのです。資本はこれらすべての人々の富を吸い上げ捕獲する。あくまでもこの新たな階級構成を起点とするかたちで、守りから攻めに転じるにはどのような組織化が必要なのかを考えなければならない。左派諸政党は依然として従来の賃労働者のロジックを前提にしていますが、現実には資本によって賃労働のロジックはすでに解体されてしまっています。たとえ今なお多くの人が形式的には賃労働者であり続けているにしても、資本による富の捕獲はもはや賃労働のロジックに基づくものではありません。」(78頁)

- 資本との闘争は、国内戦争となっている。資本の暴力階級化。それへの対応がなされていない。
- 帝国主義戦争は植民地の獲得と再分割だった。この戦争は植民地・従属国では内戦だった。この内戦に似た状況が先進国で起きている。
- 社会民主主義の不可能性、改良主義の不可能性、進歩の不可能性。

#### (参考資料)

杉村昌昭、村澤真保呂、境毅編『既成概念をぶち壊せ！—100 語事典—』(晃洋書房、2016年)より、

### 負債 境毅

負債、借金、自己破産。これは現在のサラ金地獄のことだ。しかし別の経路も存在している。負債、投資、金融資産。これは企業への貸付のことだ。この両者が混在してしまったのが今日の米国のグローバル資本市場であり、ここから新しいタイプの金融危機が発生し、その事後処理が社会を疲弊させている。

楊枝嗣朗によれば、すでに1984年12月の時点で、米国での資本市場規模は、モーゲージ関係の商品、約2兆ドル(31,6%)、株式時価総額は2兆ドル(31,6%)、社債約5960億ドル(9,3%)、政府関係証券1,2兆ドル(19,1%)、免税債543億ドル(8,5%)であった。リーマンショック直前の2006年には、米国での非金融機関関係債務を見ると、大部分がモーゲージからなる家計債務が44,3%を占め、企業債務33,1%、政府債務22,6%となっていた。(『季刊経済理論』51巻3号、所収、岡本恵也・楊枝嗣朗共著「グローバル金融資本主義の歴史的位相」、26頁)

楊枝はこの米国資本市場の変容を「企業生産金融優位」から「家計消費金融優位」へのコペルニクスの転回と捉え、この観点から中央銀行の金融政策の変化についても、連邦準備制度理事会が、これらの消費者ローンを担保とした証券化商品の買い入れ、担保とした貸出、非伝統的金融政策を実行したことで、中央銀行の最後の貸し手機能は企業部門から家計部門へ前進した(同書、28頁)と捉えた。

資本家的企業にあつては、負債は事業を拡大するための手段であり、競争に勝ち抜くための不可欠なものである。近代的信用制度は、資本家的企業への貸付によって発達し、またそれは経済成長を促進してきた。金融恐慌や産業恐慌は、過剰な生産の整理としての意義をもち、景気循環の一局面をなし、恐慌の後にはより高度な生産力の発展が見られたのである。

資本家への貨幣の貸付は、貨幣の資本としての使用価値の譲渡であり、貨幣資本家の貨幣が機能資本家に譲渡され、機能資本家が事業を進めて利潤を獲得し、その利潤のうちから利子を払う、という形で貨幣が貨幣資本家に還流する形をとる。これが近代的利子生み資本の運動である。

これに対して、それ以前から存在していた高利資本は、王侯貴族や農民などの消費者に対して貸付け、リスクが高いため高利をとる。この場合は資本として機能する貨幣が貸付

けられるわけではない。高利資本は消費者に寄生することで将来の所得を奪い、これが回りまわって生産活動に対する制約となり社会を疲弊させ停滞させる。高利資本はサラ金などの形で、現在でも健在であったが、しかしそれは近代的利子生み資本の運動である企業金融の陰の存在であり、資本市場とは無縁の存在であった。

ところが、企業金融の飽和状態に直面した現代のグローバル資本市場は、高利資本を土台に仕組みを作り、これを証券化して企業金融資産と並んで資本市場に登場させることを可能としたのだ。そしてその規模は半端ではなかった。

吉田繁治は金融資産＝負債論を提起して今日の金融恐慌を独自の視点から分析した。

吉田によれば、1990年からの日本、2008年からの米国、2010年からの欧州の金融危機に対する処方全部同じで、政府が国債を発行して、金融と経済の危機対策費にし、中央銀行は金利をゼロになるまで利下げし、国債を買って量的な緩和というマネーの増発を行う、というものだった。これによって、政府と中央銀行は、不良債権を発生させた金融機関を、貸付と不良化した資産の購入という形で救済したが、この救済は、金融機関に発生した不良債権が政府と中央銀行に移転することとなり、次は、政府の債務である国債の危機に向かう（『膨張する金融資産のパラドックス』ビジネス社、2015年、6頁）というのだ。

消費者信用の証券化による資本市場での取引は、高利資本というその本性からして、経済成長に貢献することなく、ただバブルを演出しただけであった。しかも金融危機の後始末が、マイナス金利を発生させている。

マイナス金利は日銀が採用する以前から、資本市場では常態化していた。徳勝礼子『マイナス金利』（東洋経済新報社、2015年12月）によれば、国際決済手段として円よりも優位にあるドルを調達しようとするときに、ドルを買うリスクを回避するために、それを借りる取引があり、日本企業が大量にもつ円を貸してドルを借りる取引が行われている。その時に円を貸す取引では、円金利がマイナスになってもドルを調達していて、日銀のマイナス金利導入以前から、円はマイナス金利であったというのだ（同書、56～7頁）。他方ドルをもつ投資家にすれば、ドルを貸して円を低い金利で調達し、それで日本国債を買えば利鞘が得られる（同書、60頁）。こうして債券市場における国債が投資から投機の対象となってきている。その結果、資本市場はわずかな利鞘を求めて巨額の取引が痙攣的に行われる場となったのだ。

資本市場における痙攣的取引が、決して経済成長に向かわないのは、高利資本を金融資産として内部化し、それによって形成されたバブルとその崩壊過程で不良債権を国債で代替することによって、利子負担をローンの借り手でもない住民すべてに転化するからだ。市民社会のあらゆる領域から利子を吸取することで社会を荒廃させるこのような経済の暴走を見過ごすわけにはいかない。ラッツァラートが『借金人間製造工場』（作品社、2012年）で提起している負債の政治経済学の確立が急務である。（『既成概念をぶち壊せ！』、44～6頁）

## 本日発売中の関連文献

「投機・信用資本主義の原理」（『資本論の核心』所収）：1300円

「グローバル資本市場での高利資本のヘゲモニー」及び

「『借金人間製造工場』を読む」（『ASSB』第24巻第3号所収）：200円

「グレーバーの貨幣起源論への疑問」（『ASSB』第24巻第6号所収）：200円

「貨幣・信用論研究の整理——負債経済論研究の準備として——」（『ASSB』第25巻第1号所収）：200円

『価値形態・物象化・物神性』：2500円

『日本の左翼はなぜ影響力を失ったか——太田昌国講演会報告集』：500円

### 第3章 6月25日負債経済論報告資料編

(資料編は引用からなり、①などの符号は、レジュメの引用文のそれと一致させてある)

#### 1. グレーバーの問題提起(『負債論』、以文社、からの引用)

目次

- 第1章 モラルの混乱の経験をめぐって
  - 第2章 物々交換の神話
  - 第3章 原初的負債
  - 第4章 残酷さと贖い
  - 第5章 経済的諸関係のモラル的基盤についての小論
  - 第6章 生と死のゲーム
  - 第7章 名誉と不名誉 あるいは、現代文明の基礎について
  - 第8章 『信用』対『地金』——そして歴史のサイクル
  - 第9章 枢軸時代(前800—後600年)
  - 第10章 中世(600~1450年)
  - 第11章 大資本主義帝国の時代(1450年から1971年)
  - 第12章 いまだに定まらぬなにごとのかのはじまり(1971年から今日まで)
- あとがき: 2014年

目次を見ればわかるように、グレーバーの大著はいろいろな分野にまたがっている。それで、ここではごく一部分になるが、基本的人権論の再審にかかわる部分と、信用論関係についてその概要を紹介しておこう。なお貨幣起源論についてはすでに論じたので省いておく。

①負債とは何か「もし歴史の教えというものがあるとしたら、暴力に基盤を置く諸関係を正当化しそれらをモラルで粉飾するためには、負債の言語によってそれらを再構成する以上に有効な方法はないということだ。」(10頁)

②「第三世界の債務国は、ほとんど例外なく一度はヨーロッパ諸国によって攻撃され征服されたことのある国々である。そして多くの場合、かつての侵略国に債務を負っている。」(11頁)

合衆国の負債の意味

「合衆国の対外債務は、諸外国(ドイツ、日本、韓国、台湾、タイ、湾岸諸国といった)の投資家が所有するTボンド(財務省長期証券)の形態をとっている。そして多くの場合、それらの諸国は合衆国の軍隊によって保護され、赤字財政支出の原因そのものである重装備の米軍基地によって覆われている。・・・中国さえも、非常に多額のTボンドを所有することで、ある程度は合衆国に奉仕させられているのであって、その逆ではないのだ。

では、合衆国財務省に向かって集中をつづける、この貨幣の本質とはなにか?これらは『融資(ローン)』なのか?それとも『貢納』なのか?」(12頁)

③「わたしたちが最初に学ぶことはそもそも仮想貨幣など新しくもなんともないということである。実のところ、それこそが貨幣の原型だったのだから。信用制度や借用証さらには経費勘定さえも、現金よりもはるかに昔から存在していた。こういった事象はほとんど文明とおなじくらい古いのだ。実際、わたしたちのみるところ、地金が支配的な時代——金や銀そのものが貨幣とみなされる——と貨幣が抽象物であり仮想的な計算単位とみなされる時代を往復する傾向を歴史は示している。しかし歴史的にみて先行するのは信用貨幣であり、今日わたしたちが眼にしているのは、中世においては、あるいは古代メソポタミアにおいてすらも、いわずもがなの常識とみなされていたであろうもろもろの想定の間接的帰結以外ではない。」(29~30頁)

- ④「貨幣が尺度にすぎないなら、それはなにを測定するのか？答えは単純だ。負債である。一枚の硬貨とは実質的に借用証書なのである。」(70 頁)  
「つまるところ、一枚の金貨はそれ自体でなにかの役に立つことはない。人がそれを受け入れるのは、他のだれもがそうするであろうと想定しているからだ。  
この意味において、通貨単位の価値とは、ある対象物の価値の尺度ではなく、ひとが別の人間に寄せる信頼の尺度なのである。」(71 頁)
- ⑤「メソポタミアにおいてと同様に、聖書においても、『自由』とは、なによりもまず負債の影響からの解放を意味するようになった。」(123 頁)  
世界宗教の両義性 「一方で、世界宗教は市場に対する怒号である。ところが他方で、そうした異議を商業的な観点から枠づけてしまう傾向をも世界宗教は有しているのである。」(127 頁)
- ⑥「では、負債とはいったいなにか？  
負債とはきわめて個別具体的な事象である。そして負債は、きわめて具体的な状況から生まれる。それがまず必要とするのは、根本的に異なっている存在とはたがいにみなしていない二人の人間の関係である。少なくとも可能性としては対等であり、本質的な次元において実際に対等であるのだが、現在のところ対等な地位にはない。だが、事態を回復する何らかの方法がある、といった二人の関係である。」(181 頁)  
「負債が返済されていないあいだ、ヒエラルキーの論理が支配的になる。互酬性は存在しない。」(182 頁)  
「かくして負債とは完遂にいたらぬ交換にすぎないのである。」(183 頁)  
「すべての人間の相互作用が交換の諸形式であるということはない。交換の形式をとるものもあるというにすぎないのである。」(183 頁)
- ⑦「起源における『原始貨幣』は、いかなる意味でも借りを返す方法ではなかった。どうやっても支払い不可能である負債の存在を承認する方法だったのである。」(200 頁)  
「実のところそれは、どのような支払いも不可能なほどかけがえのない価値あるものを要求していることの承認なのだ。女性の贈与に見合う支払いは、ただひとつ、べつの女性の贈与のみである。それまでは、ひとができることといえば、ただ、その未払いの負債を認知することだけなのである。」(201 頁)
- ⑧「人間経済においては、なにかを売ることができるようにするには、まずそれを文脈から切り離す必要があるのだ。奴隷とはまさしくこれである。すなわち、奴隷とはじぶんたちを育てあげた共同体から剝奪された人びとのことである。」(222 頁)
- ⑨「かつては尊厳を測定することに使用されていたおなじ貨幣が卵や散髪に支払うために使用されはじめると、その経済になにが起こるのか？古代メソポタミアや地中海世界の歴史があきらかにするように、その結果は根底的かつ永続的なモラル上の危機であった。」(266 頁)
- ⑩「これまで強調してきたように、歴史的にみると、戦争と国家と市場はすべてたがいに育み合う傾向にある。征服は徴税につながる。徴税は市場を創設する手段となる。市場は兵士と行政官にとって好都合である。メソポタミアの事例にかぎって言えば、こういったすべてが負債の爆発的上昇と複雑な関係をもち、負債の爆発的上昇はあらゆる人間関係——その延長で女性の身体——を潜在的商品に変容させる脅威をもたらしていた。」(270 頁)
- ⑪「メソポタミアの夫も妻を売ることではできなかった。あるいは通常はできなかった。ところが夫が借金に頼ってしまったとき、すべてが一変する。というのも借金となれば、そのために妻子を抵当に入れることは——みてきたように——完全に合法であり、返済できなければ、まさに奴隷や羊や山羊とまったくおなじように、債務の人質である妻子を奪われる可能性があったのだから。このことはまた、名誉と信用が実質的に同一のものになったことを意味する。少なくとも貧しい男にとって、じぶんの信用価値とは、まさにみずからの世帯に対する統率力であった。そして家庭における権威ある関係、すなわち原則として配慮し保護する責任であるような関係が、実際に売買可能であるような所有権となった

のである。」(272 頁)

⑫「古代中東における抵抗は常に、反乱の政治というより大脱出の政治、つまり共同体や家族とともに——しばしば連れ去られてしまう前に——逃散することの政治である。」(276 頁)

「世界中の聖典——旧約聖書、新約聖書、コーランをはじめ中世から現代にいたるまでの宗教文学など——は、腐敗した都市生活に対する軽蔑と商人に対する疑念、そしてしばしば強烈な女性嫌悪症の合体からなる、この叛逆の声を反響している。」(276 頁)

⑬「ほとんどの都市が最終的にみいだした解決策は、近東のそれとは大きく異なるものであった。定期的な恩赦を制度化するかわりに、ギリシャ諸都市は負債懲役制度を制限するか全面廃止する方向にむかい、次いで将来の危機を防ぐため〔領土〕拡張政策をとり、貧者の子供たちを送り込んで海外に軍事的植民地を確立したのである。またたくまにクリミアからマルセイユまでの沿岸全体にギリシャ人都市が点在するようになり、今度はそれらの都市が活発な奴隷貿易の流通経路としての役割をはたすようになった。奴隷の急増は、転じて、ギリシャ社会の性格を徹底的に変質させた。なによりも、つつましい生活を送る市民さえも都市の政治的・文化的生活に参加できるようになり、真の市民的意識を抱くようになったのである。だがこのことが旧貴族階級をして、新しい民主国家の卑俗性やモラルの荒廃と彼らの眼にはみえたものからみずからを遠ざけるべく、ますます手の込んだ手段を発展させるように駆り立てたのである。

ギリシャが真の幕開けをむかえる前 5 世紀には、だれもが金銭について議論していた。現存するほとんどの文献の執筆者たちは貴族であるが、彼らにとって金銭とは腐敗の化身であった。貴族たちは市場を軽蔑していた。名誉ある男たちの理想は、必要なものすべてをじぶん自身の地所で調達し、現金をいっさい手にしないことだったのだ。」(282 頁)

「いずれの場合も貴族たちは、贈与と気前のよさと名誉の世界をあさましい商業的交換の上位に位置づけたのである。」(282 頁)

⑭「アテナイでは、その帰結は手のつけようのないモラル上の混乱であった、貨幣、負債、金融の言語が、モラルの問題についての強力な——かつ最終的には抵抗しがたい——思考法を提供したのである。人びとは、ヴェーダ時代のインド同様、生を神への負債ととらえ、義務を負債と考え、名誉の負債〔信用借り〕を文字通りに信じ、負債を罪悪、復讐を負債の回収とみなしはじめた。」(294 頁)

⑮「ローマ法において、所有すなわちドミウムとは、人が物に対して持つ絶対的権力によって特徴づけられる『人と物との関係』である。この定義は、はてしのない概念上の問題を引き起こしてきた。まず、生命をもたない物体と人間が『関係』をもつことがどういうことか、はっきりしない。人間どうしは関係をもつことができる。だが、その関係は常に相互的なものだ。では、物と『関係』をもつとは、いったいどういうことか?・・・そこにはほかにだれもいなければ、所有権についておもしろい悩む必要などないからだ。

すると、所有とは人と物の関係などではないことはあきらかである。それは、物にかんする人びとのあいだの了解あるいは取り決めなのである。」(299 頁)

「しかし、無理からぬことであるが、ひとりの人間と地球上のそれ以外の全員のあいだの関係を、それそのものとして把握することは難しい。物との関係として考える方がずっとかんたんなのである。」(299 頁)

⑯「絶対的私的所有という観念は奴隷制に由来している。つまり、所有を人間どうしのあいだの関係ではなく人間と物とのあいだの関係として想像するには、どちらかの一方が物であるような二人の人間どうしの関係を出発点とすればよい。」(301 頁)

⑰「ローマの法学者たちがなによりもまずおこなったのは、家庭内の権威の原理、すなわち人間に対する絶対的権能の原理を取り込み、そういった人間の一部分を物として定義し、もともとは奴隷に対して適用されていた論理を、ガチョウや馬車や納屋や宝石箱などなどに、つまり法律が関与するすべてにまで、拡張することであった。」(303 頁)

「しかしながら、ローマの奴隷制による浸透力ある悪影響の最たるものは、ローマ法を通

じて、人間の自由についてのわたしたちの観念に大混乱がもたらされたことである。・・・古代世界のどこにおいても、『自由』であることはなによりもまず奴隷ではないということの意味していた。」(306 頁)

「自由とは原理的にみずからの所有物についてなんでも好きなことをする権利であると考えた伝統は、まさにこれなのである。実際には、その伝統によれば所有は権利とされるだけにとどまらず、権利それ自身が所有の一形式とみなされるのだが、ある意味でこれは、逆説中の逆説である。」(309 頁)

「賃労働、それは実質的には、奴隷制が自由の売却とみなしうるように、自由の貸与なのである。」(311 頁)

⑱「ここでようやく、じぶん自身を主人であると同時に奴隷として定義するわたしたちの奇妙な習慣について、みずからの自由の主人としての自己とか、じぶん自身の所有者としての自己とか、そのような概念でもって古代の世界の最も野蛮な側面を複製しているわたしたちの奇妙な習慣について、つまるところいったいなにが問われているのかがみえてくる。これこそが、わたしたち自身を完全に孤立した存在として想像しうる唯一の方法なのである。」(316 頁)

⑲「そこで枢軸時代を前 800 年から後 600 年と定義してみよう。すると枢軸時代は、世界の主要な哲学的潮流すべてのみならず、ゾロアスター教、預言者的ユダヤ教、仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教、儒教、道教、キリスト教、そしてイスラーム教という、今日の主要な宗教すべての誕生を目の当たりにした時代となる。」(337 頁)

⑳「ほとんどの貴金属は、富裕な女性の足首飾りや王が家臣に贈る先祖伝来の聖杯のかたちをとるか、貸付の抵当としてインゴットのまま神殿に貯蔵されていた。ところが、どういふわけか枢軸時代に、こうした事態がいつせいに変化をはじめた。経済史家たちが好む言い方では、大量の金と銀と銅が『脱宝物化』するのである。それらは神殿および富裕層の邸宅からとりだされ、ふつうの人の手にわたり、小さな断片へと分解され、日常の取引で使用されはじめたのである。」(339 頁)

「そのほとんどは盗まれたのだ、と。この時代は戦争が一般化した時代である。そして、戦争の性質上、貴重品は略奪されるものである。」(339 頁)

「枢軸時代には、それに加え、またもや中国、インドそしてエーゲ海沿岸に共通した新しい現象がみられた。貴族の戦士とその家臣ではなく、訓練を受けた職業軍人によって編成された新種の軍隊の隆盛である。」(340 頁)

「以降、国家発行の硬貨のみを報酬、礼金、税金として受け入れると布告することによって、国家は、後背地にすでに存在していたおびただしい社会的通貨を圧倒し、統一的な国内市場のようなものを確立することができたのである。」(341 頁)

「軍事＝鑄貨＝奴隷制複合体」(344 頁)

㉑「なにが変化したのか理解するには、枢軸時代のはじまりに出現したある特殊な種類の市場にふたたび目をむける必要がある。すなわち、隣人さえも赤の他人のごとく扱うことを可能にした、戦争から生まれた非人格的な市場である。」(356 頁)

「ここから枢軸時代には人間の動機についての新しい思考法が生まれる。すなわち動機の根本的な単純化であって、それが『利益』や『優位性』のような概念について語りはじめることを可能にするのである。そして次のような想像をめぐらせることも可能になる。人間が本当に追及しているものは、いついかなるときもそれ〔利益、優位性〕である、と。」(357 頁)

㉒370 頁からのまとめ

「こうしてみると、ここにみられるのは奇妙な往復運動、攻撃と反撃ということになる。そんな動きによって、市場、国家、戦争、宗教のすべてが、たえず分離したり、あるいは結合しあうのである。可能なかぎり簡潔に要約してみよう。

(1) 少なくとも近東においては、市場はまず政府の行政機構の副次的効果として出現したようだ。しかしながら時がたつにつれ、市場の論理は軍事的活動に巻き込まれていった。

そこでは市場の論理は、枢軸時代の戦争における傭兵の論理とほとんど見分けがつかなくなり、最終的にその論理が、政府それ自体を征服し、政府の目的そのものまで規定するようになった。

(2) その結果、軍事＝鑄貨＝奴隷複合体の出現する場所ならどこにおいても、唯物論哲学の誕生がみられるようになる。唯物論的であるというのは、次の二つの意味においてである。すなわち、聖なる諸力でなく物質的諸力から世界は形成されていること、人間存在の最終的目的は物質的富の蓄積であるということ。そしてそこでは、徳性や正義のような諸理念も、大衆を満足させるべく設計された道具として再文脈化されていった。

(3) どこにおいても、こうした事態と格闘しながら、人間性と魂についての思想をつきつめ、倫理と徳性の新しい基盤をみいだそうとする哲学者たちがみいだされる。

(4) どこにおいても、こうした並外れて暴力的かつ冷笑的な新しい支配者たちと対決しながら不可避免的に形成された社会運動と共同戦線を張る知識人たちがみられる。そこから人類史にとって新しい現象が生まれた。すなわち、知識人の運動でもある民衆運動である。このとき現存する権力装置に対立する人びとは、現実の性質についての特定の種類の理論の名のもとに対立するという想定が現れたのである。

(5) どこにおいても、これらの運動は、政治の基盤としての暴力という新しい発想、とりわけ侵略的戦争を拒絶したがうえに、何よりもまず平和運動であった。

(6) どこにおいても、非人格的市場によって提供された新しい知的道具を使って新しいモラルの基盤を考案してやろう、という初発的衝動があったようだ。そしてどこにおいても、それは頓挫した。社会的利益という思想をもってその課題に応じた墨家は、わずかのあいだ隆盛をきわめたかとおもうと、たちまち瓦解した。そして、そのような思想を全面的に拒絶した儒家が取って代わったのである。すでにみたように、モラル上の責任を負債の観点から再定義しようとする試みは——ギリシャとインドとに出現した衝動だったが——新たな経済的状況によってほとんど不可避免的だったとはいえ、一様に不満を残すものであったようにみえる。それよりいっそう強力な衝動が、負債が全面的に廃棄されてしまうような、もうひとつの世界を構想することのうちはみられる。だがそこでは、ちょうど身体が監獄であるように、もろもろの社会的絆も束縛の諸形態とみなされてしまったのだ。

(7) 統治者の姿勢は、時とともに変化した。当初は、個人としては冷笑的は現実政治の諸説を信奉しながら、新しい哲学的、宗教的諸運動に対しては興味本位の寛容を示していた。だが、交戦する諸都市および諸公国に大帝国がとってかわるにつれ、そしてとりわけこれらの帝国が拡張の限界に達して軍事＝鑄貨＝奴隷複合体を危機に引きずり込むにつれて、すべてが変化した。インドでは、アショーカ王が仏教にもとづく王国の再建を試みた。ローマでは、コンスタンティヌス帝がキリスト教に救いを求めた。中国では、類似した軍事的及び経済的危機に直面した前漢の皇帝である武帝が儒教を哲学として採用した。三人のうち、最終的に成功したのは武帝のみであった。形を変えながらも中華帝国は 2000 年にわたって存続し、そのあいだ儒教がほとんど公式イデオロギーの座にとどまったのだから。コンスタンティヌス帝の場合、西ローマ帝国は崩壊したが、ローマ教会は存続した。アショーカ王の計画が、最も成功から遠かったといえる。彼の帝国は崩壊し、より弱体でほぼ分断されていた諸王国がそれに取って代わっただけでなく、仏教自体が、かつての彼の版図からほとんど駆逐されていった。それでも仏教は、中国やネパール、チベット、スリランカ、朝鮮半島、日本そして東南アジアのほとんどで、より確固たる根を下ろしたのである。

(8) その最終的効果は、人間の活動領域の一種の観念的分断であって、それは今日までつづいている。すなわち、かたや市場、かたや宗教というわけである。もっとおおざっぱにいてみよう。利己的な物財の獲得に社会のある部分をあてがったとする〔市場〕。すると、誰か別の人間が、それとは別の領域を確定しようとするであろうことは、ほぼ不可避である。そしてその領域から説教をはじめのわけである。究極の価値という観点から物質的なものは無意味である、利己的なものは——自己すらも——幻想である、与えることは

受けとることよりも高貴である、と。いずれにせよ枢軸時代の宗教が、それ以前に存在しないのも同然だった慈愛の重要性をおしなべて強調したことは、まちがいなく重要である。純粋な食欲と純粋な寛大とは相補的な概念なのである。どちらも他方抜きでは想像することすらできない。双方とも、そのような純粋かつ目的の限定されたふるまいを要求する制度的文脈においてのみ生じたのだ。そして、双方とも、非人格的で物理的な鑄貨が姿をあらわす場所であればどこでも、そろって出現しているようにおもわれる。」(370～3頁)

②③「枢軸時代において商品市場と普遍的世界宗教という相補的な理念の出現がみられたとすれば、中世は、それら二つの制度が合流しはじめる時代であった。

どこであれ、それは帝国の崩壊とともに始まった。やがて、新しい国家が形成されたが、それらの諸国家においては、戦争と地金と奴隷制のあいだにむすばれた紐帯は解体してしまう。征服のための征服や富の獲得のための富の獲得が、政治的生活全般の目的として称賛されることはもはやなくなった。それとともに、国際的取引の管理運営から局地的市場の組織化までをふくむ経済生活は、宗教的権威の規制によってますます衰退していった。・・・だとするなら、ここにある中世は、わたしたちがこれまでなじんできたものとは異なった中世である。わたしたちのほとんどにとって、『中世』とはいまだ、迷信と不寛容と圧政の同義語である。しかし、地球の居住者ほとんどにとって、それは枢軸時代のさまざまな恐怖からのめざましい改善としか映らなかつただろう。」(376頁)

「とはいえ、固有の意味での中世のはじまった場所は、ヨーロッパではなくインドや中国であり、400年から600年のあいだのことである。それからイスラームの擡頭とともに、ユーラシア大陸の西半分を席卷していった。それがヨーロッパに到達したのは、ようやく400年後のことだったのである。」(378頁)

②④「近代的銀行の先駆は、通常テンプル騎士団として知られている・・・戦闘的な修道士たちの集団であった彼らは、十字軍を資金援助するうえで中心的役割をはたした。・・・要するに、キリスト教徒が最初にイスラームの金融技術を導入したのは、イスラームに対する攻撃を資金繰りするためであったようにおもわれる。」(433～4頁)

②⑤「枢軸時代が唯物論的な時代だったなら、中世はなによりも超越性の時代であった。古代帝国の崩壊のあとに新しい帝国の勃興をみるといったことはほとんど起きなかつた。そのかわり、かつて反体制的であった大衆宗教運動が支配的な制度へと一躍成り上がる。」(441頁)

②⑥「中世の思想にひとつの本質があるとすれば、それは権威への盲従のうちにはなく、わたしたちの日常活動——ことに宮廷と市場——を支配する諸価値は、混乱し、過誤にあふれ、錯覚に満ち、倒錯しているという根強い信念のうちにあった。真の価値はどこかべつの場所に、つまり、直接知覚することはできないが学習と瞑想によってのみ接近しえる領域にある。しかしこのことが、転じて、瞑想の権能と知の問題全体を、解決なき問いにしまったのだ。」(442頁)

「おどろくべきことだが、儒教による商人への非難とイスラームによる商人の礼賛は究極的にはおなじ帰結に達している。すなわち、双方とも市場の繁栄した豊かな社会であったが、近代資本主義の特徴となる大規模なマーチャントバンクや産業機構を形成することはなかつたのである。」(450頁)

法人の観念はヨーロッパ中世の産物(451頁)

②⑦「したがって、資本はたんなる貨幣ではない。貨幣に転化しうる富ですらない。とはいえ、貨幣を用いてさらに貨幣をつくるべく政治権力を利用することでもない。・・・だが、貨幣は一貫して政治的道具でありつづけた。帝国が崩壊し軍隊が解除されると、装置全体があっけなく雲散霧消したのはそのためである。ところが、新たに擡頭してきた資本主義的秩序のもとでは、貨幣の論理に自律性が与えられた。政治的・軍事的権力は、徐々にその貨幣の論理の周辺に再編成されるようになる。これこそが、国家と軍隊をそもそも背後に抱えていなければ決して存在しえぬ金融の論理だったので。」(474頁)

②⑧「それゆえ、資本主義の起源の物語は、市場の非人格的力による伝統的共同体の段階的

解体の物語ではないのである。それはむしろ、信用の経済がいかにして利益の経済にて転換されたのかという物語であり、非人格的——でしばしば報復的——な国家権力の侵入によってモラルのネットワークが段階的に変容させられていく物語なのだ。」(491頁)

②⑨「銀行家によって中世国家がうまく統治されていたところでは、政府の財政を操作することは、より安全でより利益を生むことがわかっていた。近代的金融手段の歴史そして紙幣の究極の歴史は、地方債発行とともに始まった。この慣行は、納税市民に強制融資を課し、それぞれに年率5パーセントの利子を約束し、『債券』または契約を交渉可能事項とすることで国債による市場を創設したのである。」(499～500頁)

「16世紀までに、すでに商人たちは為替手形を利用して負債を決済していたものの、政府の諸々の債券——ラント〔フランスの利付国債〕、フーロス〔スペインの年金型債券〕アニュイティ〔年金〕——こそが新時代における真の信用貨幣であった。」(500頁)

③⑩「イングランド銀行が創設されたのはロンドンとエディンバラの商人40人——その大部分がすでに国王への債権者であった——からなる協会が、対仏戦争を援助するため、国王ウィリアム三世に120万ポンドの融資をおこなったときであったこととおもいだそう。その見返りとして銀行券発行を独占する株式会社を許可するよう、彼らは王を説得した。そして、その銀行券は、事実上、王が彼らに負っている額面の約束手形だったのである。これが世界初の独立した国立中央銀行であり、それは小規模の銀行間でやりとりされている負債の手形交換所となった。その手形が、まもなく、ヨーロッパ初の国家紙幣に発展していくのである。」(501～2頁)

③⑪「ここでわたしたちは奇妙な逆説に直面する。資本主義と関連づけられるようになった金融装置を構成するほとんどすべての要素——中央銀行、債権市場、空売り、証券会社、投機バブル、証券化、年金といった——が、経済学という科学のみならず、工場そして賃労働にさえ先だって出現していたのである。このことはおなじみの見方に対する真の挑戦である。」(509～10頁)

「かつて人びとに身の周りのすべてを潜在的な利潤の源泉としてみることを強制していた非人格的な仕組みだったものが、人間の共同体それ自体の健全性を判断する唯一の客観的な尺度と考えられるようになったのだ。

わたしたちの基盤となる日付である1700年を出発点としてみるならば、近代資本主義の黎明期に現れるのは信用と負債の巨大な金融装置である。」(510頁)

③⑫「この章で試みるのは、第一に、現在のシステムがどのように機能しているかを詳細に分析することよりも、次の点について認識しようというものである。これまで分析してきた長期のパターンは現在どのように作動しているのだろうか、そのパターンはわたしたちの将来について少なくともヒントを与えてくれるだろうか、というのも現代はまちがいになく過渡的な時代だからである。」(537頁)

③⑬「すなわち戦争と軍事力の役割である。魔法使いが無から貨幣を創造する奇妙な能力を保持していることには理由がある。その背後には、銃を持った男が控えているのだ。

なるほど、ある意味では銃をもった男はことのはじまりからそこにいた。すでに指摘したように、近代の貨幣は政府債務『国債』に基盤をおいているし、政府が債務を負うのは戦費調達のためである。・・・中央銀行の創設が表現していたのは、戦士の利害と金融業者の利害との結合の恒常的な制度化であり、ルネッサンスのイタリアに端緒をおいている。それがやがて金融資本主義の基盤になったのである。

ニクソンがドルを変動化させたのも戦費捻出のためであった。」(538頁)

③⑭「ドルを変動化することによってニクソンは、合衆国通貨を純粋な『法定不換紙幣』——合衆国政府がそう主張することによってのみ貨幣として扱われる内在的価値のないただの紙片——へと転換させた。そう多くのひとが考えている。だとすると、いまや合衆国の軍事力のみがその通貨を支えているのだと主張することもまたできよう。ある意味でのこの主張は正しい。しかし『法定不換紙幣』という観念は、貨幣はもともと金で『あった』ということを前提としている。ところが、本当のところ、わたしたちが目にしてるのは、

信用貨幣の新手の変異体なのである。

一般的に信じられていることとは逆に、『好きなときにお札を刷る』ことを合衆国政府はできない。なぜならアメリカの貨幣は、連邦政府によってではなく、連邦準備制度の保護のもとで、民間銀行によって発行されるからである。連邦準備機関は——その名称にもかかわらず——特殊な形態の官民混成体であり、いくつもの民間銀行の共同事業体なのだ。運営委員会こそ議会の承認にもとづいて大統領に任命されるものの、それ以外は自律的に操業されているのである。アメリカで出回っているすべてのドル紙幣は『連邦準備銀行券』である。つまり連邦準備制度がそれを約束手形として発行し、それぞれの紙幣に4セントずつ支払って合衆国造幣局に印刷を委託する、というものである。このような仕組みは、もともとイングランド銀行によって開発された図式の一変異体である。つまり、連邦準備制度が財務省長期証券を購入することによって合衆国政府に金銭を『貸付け』、それから政府が負っている（政府の借金である）額面を他の諸銀行に貸し付けることによって、合衆国の負債を貨幣化するのである。」（539頁）

③⑤「合衆国の軍隊は、それ以外のどの軍隊とも異なり、グローバルな権力掌握を指針としつつけている。海外に設置されたおおよそ800の軍事基地を通し、地球上のどこへでも強靱な力で介入するべし、なる指針である。」（541頁）

③⑥「このように、自由に変動するドルの登場から直接にもたらされた諸々の帰結は、資本主義自体がそもそも基礎をおいていた戦士と投資家の同盟との決別ではなく、むしろその究極の神格化とでもいうべき事態を示している。またその仮想貨幣への回帰が、名誉と信頼の諸関係への大いなる回帰にみちびかれることもなかった。現実はその真逆である。だが、わたしたちがいま問題にしているのは、これから何世紀もつづくであろう歴史的時代の端緒である数年なのだ。」（544頁）

③⑦「これらの新しい信用システムはすべて、人びとの間の信頼関係によってではなく、利潤追求を旨とする株式会社によって仲介されている。そして合衆国のクレジットカード産業の最初期かつ最大の政治的勝利は、利子を課しうる可能性を秘めた対象に対するすべての法的制限の撤廃であった。

歴史を参照することに意味があるとすれば、仮想通貨の時代とは、戦争、帝国の構築、奴隷制、負債懲役制度からの離脱でなければならず、かつ地球的規模にわたる債務保護の制度の構築にむかわねばならないはずである。ところが、わたしたちはこれまで、それとは反対の事態を経験してきた。新しい世界通貨は古い世界通貨以上に、軍事力にしっかりと根づいている。」（544頁）

③⑧「だが、中国の参加はそこに全く新しい要素を導入したのである。中国の視点に立ってみると、まさにこれは、合衆国を伝統的な中国の従属国にしていく長期の過程の第一段階であると考え、それほど無理はない。」（550頁）

③⑨「2008年の大暴落についても同様の視点からみることができる。つまり、債権者と債務者、富者と貧者のあいだの長年に渡る政治的な抗争の帰結とみなすことができるのである。実際、ある次元においては、それはまさに見かけどおりのものである。要するに、詐欺、信じがたいほど洗練されたポンジスキームである。しかし、次元を移動してみれば、それは貨幣と信用の定義をめぐる闘争の頂点とみなすこともできるのだ。」（551頁）

④⑩「この帰結については、包摂の危機と呼ぶことができるかもしれない。1970年代の後半には、現存する秩序があきらかに崩壊をはじめ、財政混乱、食料暴動、石油危機、成長の終焉や生態系の危機をめぐる終末論の横行などに同時に悩まされるようになった。やがてあきらかになったように、これらすべてが、それぞれの仕方、民衆に対してこの契約の果たされぬことを告知していたのである。」（554～555頁）

④⑪「新しい分配体制においては賃金はもはや上昇せず、そのかわり労働者たちは資本主義の断片を購入するよう奨励されるようになった。金利生活者を安楽死させるかわりに、今や万人が金利生活者になることができるというわけである——実質的には、劇的に高まっていくじぶん自身への搾取率が生みだした利潤のわずかの断片を分けてもらえるというこ

とだったのだが。」(555頁)

④②「いまや万人が負債を抱えているという事実(合衆国の家庭の負債は今や収入の130%平均という推定である)この負債が競馬で一発あてようとしたとかぜいたくしたといった理由でかさだものでないという事実である。それは、経済学者たちが裁量消費支出と呼んでいる出費のために借りたもの、つまり、主要には子どもに与えられ、友人たちと共有され、あるいはさもなくば他者との関係——要するに単なる物質的計算以外のなにものかを基盤にした関係——を構築したり維持したりするためのものである。いまやひとが単なる物理的生存を超えた生を獲得するためには、負債に依存せねばならないのである。」(560頁)

④③「わたしたちは、いま、真に特異な歴史的転換期を生きている。信用危機は、前章で提起した原理、すなわち、資本主義はそれが永続するであろうと人びとが信じる世界においては機能することはできないという原理を、生々しく描写している。」(563～4頁)  
社会運動の展望を見出せず、抵抗運動が勝つことはないという意識に追い込む執念。恐怖と愛国主義的順応と、絶望感。

④④「いいかえると、すべてを管理する唯一の方法として資本主義を制度化せねばならないという政治的義務と、投機が統制不能な混乱におちいらぬようその未来の地平を限定せねばならないという資本主義そのものの公認されざる必要性のあいだに、深刻な矛盾があったのだ。そしていったん制御不能の混乱が起こるや、機械全体が内破し、わたしたちは、事態を建て直すそのようなべつの方法をも想像することさえできないという奇妙な状況に取り残されたのだ。わたしたちが想像することのできる唯一のものは、破局である。」(565～6頁)

④⑤「本書でわたしが試みたのは、次代の展望を提示することではなく、わたしたちの視野を開放し、わたしたちの可能性についての感覚を拡大することであった。つまり時代にふさわしい大きな尺度と規模で思考を開始するとはどういうことか、問いかけはじめることである。」(566頁)

④⑥「市場は、ひとたびみずからの暴力的起源から完全に手を切ることができるようになると、きまって別のものへと、たとえば名誉、信頼、相互的紐帯などの織り成すネットワークへと成長していく。」(571頁)

#### ④⑦結論

宇宙秩序に負債を負っているという考え、自身の存在基盤と交渉できるという間違った考えに基礎をおいている。逆に世界こそが、あなたから生を借りている。

「わたしにとって、まさにこれこそ(金融の命法)が負債のモラルリティをかくも邪悪にしているものなのである。すなわち、金融の命法が、たえずわたしたちを、好むと好まざるとにかかわらず、たんにカネになるものとしてしか世界をみない略奪者もどきへと還元している、そのやり方である。」(575頁)

「現在の経済秩序がはらんでいる自己破壊衝動を共有しようとしなさい、新しい経済秩序の先駆者」(576頁)

借金は返すべきというモラルへの批判。この原理が破廉恥なウソだった。

「つまるところ負債とはいったいなにか?負債とは約束の倒錯にすぎない。それは数字と暴力によって腐敗してしまった約束なのである。」(578頁)

真の自由:「いかにしてわたしたちは、それを発見することのできる場所にまでたどりつくのか、である。」(578頁)

## 2. ラッツアラートの問題提起

### (1)『借金人間製造工場』(作品社)より

①「この主題の核心にある“債権者/債務者”関係は、搾取と支配のメカニズムやさまざ

まな関係性を横断して強化する。なぜならこの関係は、労働者／失業者、消費者／生産者、就業者／非就業者、年金生活者／生活保護の受給者などの間に、いかなる区別も設けないからである。すべての人が＜債務者＞であり、資本に対して責任があるのであって、資本はゆるぎなき債権者、普遍的な債権者として立ち現れる。」(17～8頁)

②「本書が提起しようとするのは、＜借金人間＞を経済的・主体的に製造する系譜の探求である。」(19頁)

③「負債の経済学は、『負債』という言葉の古典的な語義からして『自らへの働きかけ』をうながし、労働を二重化する。したがって、経済と『倫理』が一緒に機能する。つまり『経済』の現代的概念は、経済的生産とその生産をおこないうる人々の主観を創り上げることが同時に包含する。」(21～2頁)

④「国民だけでなく、企業もまた餌食にされている。新自由主義政策は、企業を単なる金融資産に変えてしまい、『企業は、株主の資産から得る以上のものを、株主に支払っている』のである。」(32頁)

⑤「われわれは、消費を通して、それと知らずに＜負債経済＞に日常的に取り込まれている。」(33頁)

「クレジット・カードは、その持ち主を永遠の債務者——終生の＜借金人間＞——へと自動的に変える、もっとも簡単な方法にはほかならない。」(34頁)

⑥「一般に『金融化』と呼ばれるものは、投資の資金調達の様態というよりも、私的・公的な負債——ようするに債権者／債務者関係——の巨大な管理装置を意味するのであり、これは証券化の技術によって行われるのである。」(38頁)

⑦「政治的に見れば、＜負債経済＞の方が、金融経済、あるいは金融資本主義よりも適切な表現のように思われる。」(39頁)

⑧「現在の危機が、金融と生産の分離、いわゆる『ヴァーチャル経済』と『実体経済』の分離に由来するものではなくて、債権者と債務者の権力関係の表現であること」(40頁)

⑨「負債は成長にとって不利な条件ではない。逆に、それは現在社会の経済的・主体的な原動力である。負債の製造、つまり債権者／債務者の権力関係の構築と発展は、新自由主義政策の戦略的核心として構想され計画された。」(40頁)

⑩「クレジットあるいは負債、そして債権者／債務者の関係はある特殊な権力関係をなし、主観性の生産と統制の特殊な様態(『経済的人間』の特殊な形態としての＜借金人間＞)をもたらす。債権者／債務者の関係は、資本／労働、福祉国家／利用者、企業／消費者といった関係に重ねあわせられ、それらの関係を貫いて、利用者・労働者・消費者を＜債務者＞に仕立て上げる。」(46頁)

⑪「負債の中に社会関係の始まりを見るということは、二つのことを意味する。一つには、経済や社会の始まりを平等を前提とする商売的交換のなかにはなく、力の非対称性のなかに見るということ、そしてさまざまな社会集団の間に力の差異を導入し、貨幣に新たな定義を与えること。なぜなら、貨幣は命令として、つまり経済や社会を破壊したり創造したりする力として直接的に姿を現すからである。

もう一つは、負債から始めるということは、経済を直接的に主観に依拠したものとして捉えることを意味するということである。なぜなら、負債は一つの経済的関係であり、その関係が実現されるには、たとえば“労働”が『自らへの働きかけ』と密接不可分になるように、人びとの主観をモデルに合わせ統制することが必要とされるからである。・・・『経済』と定義されるものは、主観性とその生きた形態の生産と統制がなければ成り立ちえないだろうということである。」(50頁)

⑫「現代資本主義の主観的主体性のパラダイムをなすのは、負債であり、債権者／債務者関係であるということだ。そこでは“労働”が『自己に働きかける作業』と二重化され、経済活動と主体を生産するという倫理的／政治的活動が手を携えて行なわれる。主観的主体性を立ち上げ、飼育慣らし、製造し、調整し、造形するのは負債なのである。いかなる仕掛けで、負債は主体を製造するのだろうか？」(56頁)

- ⑬「現在企てられているいかなる金融改革も、目的は一つしかない。すなわち、未来を対象化しながら、未来に先駆けて体制を整えることである。この対象化は労働時間の対象化とはまったく異なった性質のものである。時間を対象化し、前もって体制を整えるということは、未来に潜んでいるあらゆる選択と決定の可能性を、資本主義的な権力諸関係の再生産に従属させるということである。かくして<負債経済>は、賃金労働者の雇用時間のみならず、人びとの使う全体の時間をわが物とする。それだけでなく負債は、非-時系列的な時間、一人一人の未来の時間、そして社会全体の未来の時間をも先買いするのである。時間のつながりがなく、可能性もなく、しかるべき断絶もない社会のなかで生きるというこの奇妙な感覚を説明しうるのは、ひとえに<負債経済>なのである。」(65頁)
- ⑭「いわゆる知識集約産業は、認知資本主義の理論が言うような階級的諸関係を包含するものではない。それは一つの装置、一種の活動形態にすぎず、他の多くの活動や権力関係と併存する——そして、それらの活動や権力諸関係に対していかなる主導権も発揮することができない——一つの権力関係の組み合わせにすぎない。そしてそれは、逆に<負債経済>の指令には従属する（文化や教育、サービスなどへの認知的領域への投資の突然のカット）。いずれにしても、階級闘争の始まりは、資本にとっても被統治者にとっても、知識経済から生じるのではない。現代の経済と社会をつらぬいて横断的に求められているのは、知識ではなくて、『経済的主体』（『人的資本』『企業家』）になるための要請である。」(70頁)
- ⑮「キリスト教による『内面化された負債』がまだ超越的な性質を持っていたのに対して、資本主義体制においては負債は『内在的』な存在になる、ということである。キリスト教が宗教のなかに導入した無限を、資本主義は経済的な次元で最発明する。お金がお金を生み出すという価値の自動運動としての資本主義の動きが、負債のおかげでその限界をなくしていくのである。」(104頁)
- ⑯「したがって賃金労働者の要求は、大多数の組合の政策と同じように、こうした従属や権力関係を受け入れて認めることにはかならない。しかし、賃金の流れが別の性質の流れの表現、別の力の流れを表現しているならば、賃金労働者の要求と購買力は再領土化が切断される地点にもなりうるし、従属の拒否を体现するものでもありうる。資本がお金（支払い手段）を資本に変えるのと同じ仕方で、プロレタリアは購買力の流れで自立的で独立した主観的主体化の流れに、資本の政治を遮断する流れに、つまりおのれが押し込められている従属的機能の拒絶——そこからの逃走——の流れに変えなければならない。」(111頁)
- ⑰「現代の新自由主義政策は、賃金を抑止し（デフレを“口実”に）、福祉支出を大幅にカットしながら、人間資本、あるいは大なり小なり負債を負い、大なり小なり貧しい——そして常に不安定な——『自分を経営する企業家』を生産する。大半の人々にとって、自分を資源にした企業家になるということは、一般企業や競争の指標にしたがって自分の雇用可能性、自分の負債、自分の賃金や収入の減少、社会保障費の削減による影響といったものを管理するだけの話になる。」(124頁)
- ⑱「したがって、われわれが経験している危機は単なる金融危機ではなくて、新自由主義の社会的統治力の失敗である。企業と所有個人主義に依拠した統治様式は破産した。危機は権力関係の本質をあらわにしながら、よりいっそう抑圧的かつ権威主義的な統制の形態に行き着こうとしている。」(140頁)
- ⑲「金融は、社会的諸権利をクレジットに、個人保険に、金利収入（株主）に、要するに個人的所有に変える戦争機械である。すべてを銀行に託しなさいというわけだ。金融は、あなた方みんなをクレジット・カードを持った消費者に変えるための、もっとも精巧な技術を見つけたのである。破綻を導くのは『投機』ではない。金融と実体経済の分離といわれるものでもない。そうではなくて、『私的所有の体制を変えることなく、すべての人を豊かにする』などという主張にかならない。」(144頁)
- ⑳「ここにおいて階級闘争は、富の二つの『社会化』のモデルの対立として表現されることになる。すなわち、“すべての人の権利と相互扶助”対“クレジットと個人保険”。崩壊

するのは、すべての人を『人間資本』に、自らを経営する企業家に変えようとする政治計画である。」(144～5頁)

②①「つまり、銀行や<負債経済>の権力システムを救うために、山のように積み重なった負債をだれが払うのかという問題である。新自由主義権力ブロックの答えは言うまでもない。国家や國民に押し付けるということだ。しかし状況は、もはや新自由主義の未熟な魔法使いたちでは、コントロールできなくなりつつあるのだ！」(146頁)

②②「私的負債は、常に国家の超越性の介入を必要とする。最終的に私的負債の循環を可能にし保証するのは、市場ではなく国家の負債である。たとえば、貨幣(造幣)の私企業家(民営化)は新自由主義者がもっとも恐れるもの、すなわち国家の力の介入に必然的に行き着く。これはまさしく、現在の危機が明らかにしていることだ。クレジット(信用)＝通貨の私的発行は、必ず国家の介入を呼び寄せる。なぜなら、私的負債は内在的な調整(市場の自動調整)がきかないからである。そしてそのとき、資本主義の途轍もない『狂気』を示す驚くべきことが出現する。つまり、国家の負債が、債権者(貸し手)とその代表者による投機と搾取の対象となり機会となるのである。彼らは、明らかに彼らに救いの手を差し伸べてくれたものを、システムティックに破壊しにかかる。民衆統制の基盤の一つ、国民国家とその行政を掘り起こすこの『狂気』を、われわれはどう考えたらいいのだろうか。私は国家の消滅を惜しむものではないが、これはそれですむ話ではない金融危機に次ぐ金融危機、われわれは永続的な危機状態に入っているのである。この単なる“危機”という概念ではとらえきれない状態を、“破局”と呼ぶことにする。」(175頁)

②③「彼ら(規範社会学)によると社会的隷属は、規範や規則、法などによって機能するのだが、実際の隷属はむしろこれとは全く逆に、技術的な手順、手続き、使用方法など、行動や反応を求めない非意味的な記号によって機能するのである。」(187頁)

②④「現在の搾取と支配の関係以外のどこから、『誤り』の理由と『紛争』の条件が出てくるだろう？負債が描き出すネガは、新たな主体化の形態と新たな生の可能性を発案するために闘争が方向転換しなければならない歴史的諸条件を規定する。いつの時代にも生じるこの方向転換の諸条件は、そのつど、歴史的・特異的・特殊である。そして今日、それは負債を中心にして結び合わされているのである。

最も緊急に求められる試みは、工業社会の中でストライキが有していた封鎖の有効性をもつような闘争様態を想像し実験することである。資本主義の司令部の脱領土化の現状は、われわれにそれを強いる。資本家と統治者の頑迷な頭には、危機の言葉と闘いの言葉しか届かない。」(202～3頁)

②⑤「階級闘争をうまい具合に再開する、つまり最も効果的なやり方で再開するには、負債との関係でこの『第二の無垢』が必要とされる。神への負債に対する第二の無垢ではなくて、地上の負債、われわれの財布にのしかかり、われわれの主体性を鋳型にはめる負債に対する第二の無垢だ。したがって問題は、単に負債を帳消しにしたり破産宣告をするということではなくて——仮にそれが非常に有用な場合でも——われわれが負債によって閉じ込められている、負債とそれにまつわる言説の道德の檻から脱出することである。

われわれは負債との関係で、われわれを正当化することを試みながら多くの時間を費やしてきたが、今までの考え方ではどんなに正当化しても、すでに正当化しきれない状態に置かれているのである。この第二の無垢を獲得して、いっさいの罪悪感、いっさいの義務、いっさいのやましさを自らを解き放ち、一銭たりとも返済しないという心構えをつくらねばならない。負債の帳消しのために闘わなければならない。もう一度思い起こしておこう。負債とは、経済問題でなく権力の問題であり、われわれを貧困化させるだけでなく、われわれを破局に導くものなのである。」(204～5頁)

(2)『資本の専制、奴隷の反逆』(航思社)所収、「資本の戦争的本性とその回帰」ラッツアラートインタビューより

②⑥「住民にたいして戦争がなされる時代が到来しています。ギリシャに対する通貨政策はあからさまに『戦争』として展開されました。金融資本は経済的＝政治的＝メディア的装置を有していますが、ギリシャではそれらの装置を武器に住民に対する攻撃を行いました。ギリシャで起きたのは従来の『階級闘争』ではない。資本家と労働者との対立ではなく、資本とその社会的形態とによる住民に対する攻撃なのです。シリアに目を移せば、こちらでもまた国家間の戦争がもはや問題になっていないことは明白です。戦争は社会の内部で起きている。」(60頁)

この種の戦争は、植民地戦争「植民地戦争は当時からすでに国家間戦争ではなく、常に住民に対する戦争であり続けてきました。」(61頁)

②⑦「ベルリンの壁の崩壊後には『新世界秩序』の到来なることが語られましたが、それがいわば『新世界無秩序』として政治的にも経済的にも軍事的にも実現されつつあるのです。これはしたがってヨーロッパだけに限定された現象ではなく世界全体の再編成だと言える。いずれにせよ、住民に対する資本の戦争というこの点がぼくにとってはなによりも重要です。もちろん『負債』という点から分析を展開し直すこともできますが、負債政治もまた戦争の一形態にほかなりません。負債はネオリベラリズムがおのれの進める戦争を統御するためのひとつの形式なのです。負債は住民をその総体において狙い撃ちにするための装置、社会的な装置にほかならない。」(62頁)

②⑧「ぼくは今日的な闘争形態として『エクソダス』を語ることに賛同していない。ぼくたちの知っている唯一の『エクソダス』は資本のそれにほかなりません。脱出したのは革命運動ではなく資本であり、資本こそがフォーディズム型の社会関係から脱したのです。戦争とはまさに社会的関係の切断のことであり、戦争は住民との関係のなかで進められるものではなく、住民にたいして進められるものとなりました。そしてまた、この切断こそがネオリベラリズムを規定します。ネオリベラリズムとは社会民主主義にたいして資本がなした『妥協』のその切断のことにほかならない。資本はもはや労働者階級との関係(福祉国家体制や賃金関係)の維持を求めている。いまや資本は社会全体を征服すべき対象としてしかみなしていないのです。」(62～3頁)

②⑨「今日の資本は生産へのいかなる貢献ももはやしていない。負債のメカニズムによって富を捕獲するだけとなったのです。

住民によって生産された富をその生産過程にいっさい貢献することなしに純粋に外部から捕獲するという手法は植民地主義のそれであり、これこそがまさにギリシャ住民にたいして負債を通じて行われていることです。」(63頁)

「今日の植民地戦争はかつて『第三世界』と呼ばれてきたような外部にたいするものでもはやなく内部に対するものとなった。」(63頁)

③⑩「フーコーが語ったのは住民を統治するということでしたが、今日の統治は住民を戦争相手に位置づけるものです。」(65頁)

③⑪「資本と労働との妥協的体制は 60 年代から 70 年代にかけて危機に陥りますが、資本はこの危機を利用して金融資本モデルへの回帰を果たすのです。二つの大戦を導いたモデル、戦争のモデルへの回帰です。金融資本が戦争を必然的に導くのは、それがいたるところに『無限』を導入するものだからです。生産にも消費にも無限を導入し、無限の収奪を組織する。リベラリズムとは収奪の無限化のことにほかならず、この無限収奪を進めるために必要とされるのが戦争のロジックであり、危機のロジックは完全に捨てられることになる。」(66頁)

③⑫「ネオリベラリズムは労働者との関係を切断し、金融を資本主義の中心におくのであり、金融を中心にすべてを編成し直すのです。」(66頁)

③⑬「今日の資本はいっさいの媒介を経ずに住民との直接的な対峙に向かう。」(69頁)

③⑭「極右政党の登場、階級闘争の激化「しかしこの状態からどう脱出すれば良いのか誰にもわからない。誰も解決策を構想し得ていない。」(70頁)

③⑮「資本と闘い得るだけの『戦争機械』をどうすれば作り出せるのか、資本と闘うために

はどのように階級構成を組織化すればよいのかという問題は、68年以來ずっと未解決にとどまり続けています。」(71頁)

⑳「シリザやポデモスの登場は興味深くはありますが、しかしやはりそれはあくまでもひとつの段階にすぎず、問題はいかにしてその先に進むかという点にあります。新たな階級構成を把握し、それにふさわしい組織化形態を見出さない限り、ぼくたちはいつまでも守りから攻めへと転じることはできない。40年間ずっと、ぼくたちは資本からの一方的な攻撃に曝され続けており、何ひとつ勝ち取っていない。」(72頁)

㉑「今日の資本による戦争はまさしく社会民主主義の不可能性、改良主義の不可能性、進歩の不可能性によって定義されます。資本がぼくたちに対して展開する戦争は、進歩によってもたらされる富をみんなで分かち合うということそれ自体を不可能にするものとしてある。」(74頁)

㉒「今日起きていることはしたがって1930年代に起きたことのカリカチュア的の反復だとも言えるかもしれない。すなわち、経済危機があつて、それが住民の生活に大きな打撃を与え、その帰結として極右が台頭するという流れであり、これがヨーロッパ全土にみられるということです。」(76頁)

㉓「新たな階級構成、新たな資本形態(金融資本、負債)、新たな戦争形態。これら三つの要素をしっかり把握した上でそのただなかでいかにして動くべきかを考えなければなりません。残念ながらぼくたちはそのずっと手前で足踏みし続けている。今日、政治を構想し得ているのは資本家たちだけであり、かれらには40年前からしっかりした戦略がある。これに対してぼくたちはいまだに何ももっていないのです。ぼくたちにあるのは政治的不能であり、加えて理論的にも不能にとどまっている。」(77頁)

㉔「これまで『住民』としてぼくが論じてきたのはこの新たな階級構成のことであり、負債政治がその攻撃対象としているのはこの新たな階級構成であつて、従来の労使関係はもはや問題になっていません。今日の資本は金融資本であつて産業資本ではないからです。金融資本は経済的=政治的=メディア的装置を通じて『住民』全体にたいして力行使する。攻撃されるのは労働者だけではもはやなく、失業者も不安定労働者も年金受給者も含む『住民』全体なのです。資本はこれらすべての人々の富を吸い上げ捕獲する。あくまでもこの新たな階級構成を起点とするかたちで、守りから攻めに転じるにはどのような組織化が必要なのかを考えなければならない。左派諸政党は依然として従来の賃労働者のロジックを前提にしていますが、現実には資本によって賃労働のロジックはすでに解体されてしまっています。たとえ今なお多くの人が形式的には賃労働者であり続けているにしても、資本による富の捕獲はもはや賃労働のロジックに基づくものではありません。」(78頁)